

咲異録～鏡花水月～

璃空埜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

(注意：しばらく凍結しています (復活予定有))

これはとある麻雀好きの少年を中心に織り成す少女たちとの青春と麻雀の物語

キャラクターは咲原作を基準としていますが強化されています。

ストーリー自体はある程度原作沿いですがほとんどオリジナルです。

目次

キャラクター設定	1
キャラクター設定2	3
高校1年生編	
プロローグ	5
第1局 狙撃主といたずら悪童と竜巻迷子と澄んだ月①	8
第1局 狙撃主といたずら悪童と竜巻迷子と澄んだ月②	25
第1局 狙撃主といたずら悪童と竜巻迷子と澄んだ月③	43
第2局 入部試験①	59
第2局 入部試験②	75

キャラクター設定2

宮永 照

身長：159cm

身体的特徴

・赤髪のショートヘア。ピョコつとでた癖毛が特徴。

・歩き方がどこことなくペンギンに似ているらしい（澄夜談）

好きな物、事：読書、甘いもの全般、妹属性の人物

嫌いな物、事：苦いもの全般

誕生日：2／18

性格：一見、常に無表情だが基本的に優しくおとなしい。

能力

・連続和了。一度和了ごとに点数が増えていく。

・照魔境。相手の持ち牌及び和了牌がわかる。

・

・

澄夜のクラスメイト。スイーツ作成が得意な澄夜とすぐに仲良くなる。

原作と同じく非常に高い能力を持っている。しかし、本人はこれに満足しておらず常に上へ上へと目指している。しかし、麻雀以外はポンコツであり、そのポンコツ具合は結構ひどく、3歩歩けば迷子になり、家事をすれば地獄絵図となり、朝も起きることができないなど挙げればきりが無い。

東京には進学のためにやって来た。そのため最愛の妹と離れ離れになっているが、毎日手紙で文通をしている。ただ、姉ぶってはいはるものの回りから見れば「ドングリの背比べ」レベルらしいのだが……。

超がつくほどの甘いもの好きであり、「黎明」を訪れてからはほぼ毎日入り浸るようになる。ただ、食べる量が異常なため、澄夜の気遣いから注文量は制限されている。

実は澄夜に一目惚れしているが、「今は」その感情が何か分かって

高校1年生編 プロローグ

——とある一家的一幕

『あう〜？あ〜…むじゅむじゅ』

『こおーら、これは食べ物じゃないわよ。……まったく、父さんか母さんがしまい忘れたのかしら』

『んん〜??』

『あら、これがなにか気になるの?』

『だ〜っ!』

『ふふっ、……やっぱり血は争えないのね…』

『んんう?』

『何でもないわ。それで……これはね……私たち家族みんなが大好きで、みんな楽しんでいることで使っている道具のひとつなの。それはね、——

——麻雀っていうのよ』

「……おおおおおにおおにおおにいいんぐ!!とおくやあ〜っ!」

「あつがうえい!」

聞きなれた騒々しい声と腹部にズドンと重い衝撃を受け、心地よい春の睡眠から目覚めてしまった。

もうちよつと寝かしておいてくれたっていいじゃないか……とい
うか溝尾にジャストミートして物凄く重痛苦しいんですが……

そんなことを臆気に考えながら痛みに堪えつつ、ゆっくりと目を開くと超至近距離に見慣れた、何故か家の姉弟の中でもいろいろ一番小さいが元気の塊である双子の末姉の片割れ、涼月 星莉奈の顔があった。

「起きたか?とーや!!」

「せ……りな姉ちゃん……。だ……いぶは……やめてくれ……」

「おー!起きたな!!ねーちゃんは嬉しいぞ!!」

「……うれ……しいなら、早く……どいてほしい……なあ……」
「いや〜。莉奈姉さん、派手に行ったねえ」

腹の上に飛び乗った星莉奈姉ちゃんをどかしていると、「あ〜れ〜」自分の部屋の入り口の方から少しいや、その状況を絶対楽しんでる声がした。そちらの方にジト目を向けると……

「やっぱり久か……」

「おはよう、澄。いい目覚めだったかしら?」

「いいわけない。せつかくいい夢見てたのに……」

「あらあら、残念だったわね。確かに莉奈姉さんと起こしに来たときとってもいい寝顔だったのよね〜♪」

「確かに可愛かった!!」

「……久が起こしてくればいいじゃん」

「なにいい!!ねーちゃんに起こされるのは嫌なのか!?!とーや!」

「そういう意味じゃないよ、星莉奈姉ちゃん……」

「なら、よし!」

「あはは……いちおうは止めたんだけどね。まあ、澄もこーんな素敵なお姉さん達に起こされてとっても嬉しいんでしょ?」

「そーだ、そーだ!」

「……起こし方にもつと目を向けてほしいんだけど……」

「ふふ、善処するわ♪」

なんて言いつつ、意地悪そうな笑顔を浮かべているのは義姉弟の涼月 久。同い年のはずなのだが久の方が数ヶ月誕生日が早いため、戸籍上姉となっている。それでいつも僕を起こしに来てくれるのだが、胡椒を振り掛けられたり、突如足裏をくすぐってきたり、服の中に氷を入れてきたりといったも何かしらいたずらを仕掛けてくる。正直、心臓が悪いのもうちよつと控えてほしいのだけど、久が楽しそうに笑っているのでそのままにしている。

だけでも、さすがに今日の何を発もやられるのはやだなあ。

「さてさて、それじゃ早く支度して朝御飯に来てね。朝姉さんと星姉さんが待っているし、夕姉さんはとっくに仕事に出たわよ。せつかくの晴れ日に遅刻なんてしたくないからね?」

「あり……？あー、そっか。今日、入学式だったっけ」

「ご飯！そーだ!!朝御飯にしよう!!」

「全く……、しっかりとよね澄。ま、とにかくちやちやつと支度してきてね。莉奈姉さん、いこ」

「ご飯〜！」と相変わらず騒々しく飛び出していった星莉奈姉ちゃんと、やれやれと肩を少しすくめるながら久が部屋を出ていった。

「星莉奈姉ちゃんがいなくなると、一気に静かだなあ……」

まあ、あの賑やかさにはとても助けられているし、慣れたもんなんだけどね。

「さて、僕も早く行かないと……」

伸びをしつつカーテンを開くと、そこに広がっていたのは雲一つないどこまでも澄みきった青空だった。

そんな空にうつすら見える月を見つめつつ、僕こと、涼月 澄夜（とうや）は静かに呟いた。

「……………月譚姉ちゃん。僕も今日から……」

「……高校生だよ」

第1局 狙撃主といたずら悪童と竜巻迷子と澄んだ
月―①

side 澄夜

ささつと身支度を整え、軽く欠伸をしつつ1階にあるリビングに入るとすでに何かが焼けるいい香りがした。

その香りに誘われるようにキッチンに向かうと現在、我が涼月家の大黒柱の代わりでもある長姉、涼月 朝日が丁度料理を皿に出し終えたところだった。

「おはよう、朝日姉ちゃん」

「おつす、澄夜。星莉奈と久が降りてくる前に何かどたばたしていたがなんかあつたんか？」

「ああ…。ちよつと星莉奈姉ちゃんにダイブされて起こされただけだよ」

「あいつ……。はあああ、もう立派な社会人だつてのにあいつの子供っぽいところは何とかなんねえもんかなあ…。同じ双子の星魅を見習えってんだ」

「はは……。ま、まあ、その元気が星莉奈姉ちゃんの良いところだと僕は思うよ」

「……相変わらずおめえも甘いな」

「あはは……」

「…まあいい。おめえの優しさは天下一品だもんな。その優しさは大事にしろよ」

「わかった。ありがと、朝日姉ちゃん」

「礼はいい。それよか、今だしたハムエッグ、テーブルに運んどいてくれ。ついでに星魅にも声をかけとけ」

「了解」

「…さて。星莉奈をしばいて来るとするか……」

……最後のは聞かなかったことにして。

頼まれたハムエッグ二つをテーブルに置いたところでどこからか

星莉奈姉ちゃんの悲鳴が聞こえたような気がしたが気のせいだろう。それより、星魅姉ちゃんを探さないといけない。

丁度、久がちよこんと待っているし聞いてみるか。

「なあ、久。星魅姉ちゃんは？」

「星姉さん？さつき『黎明』の方に行つたわよ」

「わかつた。それならいつものところか…」

「そういうえば、なんか莉奈姉さんの悲鳴が聞こえたような気がするんだけど？」

「さあ、気のせいなんじゃないかな」

「……大方、朝姉さんの折檻を受けたのだろうけど…。」

「関わらない方が良さそうね」

「その方がいいと思うよ。じゃあ、僕は星魅姉ちゃんを呼んでくるよ」「は〜い」

僕はリビング中央にある引き戸を開き、隣の雀荘喫茶店『黎明』に入った。

この雀荘喫茶店『黎明』は現在、世界を飛び回っている両親が双子の星姉ちゃん達が生まれたぐらいの頃に始めたらしい。最初は両親が切り盛りしていたんだけど朝日姉ちゃんが高校卒業した頃ぐらいから子供達に店を任せるようになった。現在は朝日姉ちゃんと星魅姉ちゃんが主に切り盛りしている。といっても僕自身ここにちゃんと身を置き始めたのは中学3年のときだったりするんだけどね。因みにそれまでは両親、久と一緒に日本全国を飛び回っていた。その際、各地で友人達と麻雀をしたのは、今でも大切な思い出だ。

「……みんな、元気かなあ…。」

「つと……過去を思い返してる場合じゃないや」

まあ、といつても探し人はもう目の前にいるんだけどね。

「星魅姉ちゃん、朝御飯の時間だよ〜」

「そう、わかつたわ」

星莉奈姉ちゃんとは対照的にとても静かな双子の末姉の片割れ、涼月 星魅（ほしみ）は、何台かある電動卓の1つに牌を並べ何か考えていた。

星魅姉ちゃんが麻雀で悩むってのは珍しくない。実際、我が家は一家全員、何かしら麻雀に関わっている。まず、両親はプロではないが世界トップの実力を持つている雀士だし、朝日姉ちゃんは麻雀の試合の解説者や高校や中学に赴いて新人雀士の育成をしている。今ほもう仕事に出た姉、夕羅姉ちゃんは日本代表にも選出されたことのあるベテランプロ雀士であり、星莉奈姉ちゃんもここ最近デビューしたばかりだけど今後の期待も大きい大型新人プロ雀士。ここにはいない結婚済みのもう一人の姉も元プロ雀士としての経験をいかし、どっかの高校で麻雀部の副顧問をしているらしい。そして、久や僕も中学では麻雀部に所属こそはできなかったが、夕羅姉ちゃん曰く、高校麻雀界でもトップクラスの實力があるとのこと。そんな中で星魅姉ちゃんは雀士達のレポートをまとめ、プロ雀士の有力ドラフト候補をあげたりする仕事をフリーでしている。そのためか、よく家の麻雀卓を使っって気になった人の打ち筋等の確認に使うことが多い。その際、僕や久も協力することが多い。

「ねえ、澄」

「うん？」

「連続して和了、しかも1回1回点数が上がっていく打ち方って可能かしら？」

「連続和了でしかも点数が上がっていく……？……うーん……：……そんな人がいると仮定するなら、対局相手の持ち牌、捨て牌を正確に把握する。それだけじゃなくて、場を支配できるような強運を持ってないと出来ないんじゃないかな……」

「やっぱりそうよね……。ねえ澄」

「？」

「もしその子と対局したら『真似』できる？」

「……その人の技量によりけりかな」

「わかったわ。……私も噂程度でしか聞いていないのだけれども、澄や久と同年の子がこの連続和了するらしいの。それで、入学した学校は白糸台の可能性が一番高いとのことらしいわ」

白糸台高校と言うのは、『黎明』の近くにある校風が結構緩めなか

なり大きな進学校で今日から僕と久も通うし、姉ちゃん達も通っていた。嬉しいことに麻雀に結構力をいれていて、星莉奈姉ちゃんを含めた何人かのプロ雀士を排出している名門古豪校だ。ただここ最近は一介の新人部員に恵まれず、常に顔を出していた全国大会にすら出場できていないらしい。朝日姉ちゃんも何度か教えに行つてはいるんだけども、「ここ最近の部員は骨のある奴がいらない」と嘆いていた。

「へえ…それは面白そうだね」

「澄ならそういうと思ったわ。…対局したら早めに教えてね。かなりの逸材だからこのチャンス逃したくないもの」

「わかったよ。話が本当ならかなりの強者だからね……。ありがとう、久にも話して探してみるよ」

「お願いね。さて…、それじゃご飯にしましょうか」

「ああ！」

その後朝食を済ませ、(星莉奈姉ちゃん)は真っ白に燃え尽きていた。

……………(南無)最後にもう一度身なりを整えてくると言つた久と自分の荷物を持ち、先に家を出ると、外は満開になった桜並木から僕と久の入学を祝うかのようにたくさんの花びらが舞っていた。

綺麗だなーとそれを見ていると、

「……………」

いつの間にか目の前に褐色のロングコートを見にまとつた赤髪の見知らぬ少女がいた。

「……………(じーっ)」

えーつと…何かとじーつと見られているような…。

「えと……………おはようございませうっ…」

「ん、おはよう」

いや、確かに各地で仲良くなった人達はたくさんいるけど、みんな顔を覚えるはずだし、実際この子は初顔なんだけど…：僕、なんかやっつけたっけ？

「……………ねえ」

「な、なに？」

あつ！ちよつと待つて!?!もしかしたら成長してわからなくなっているなっている可能性が……!?!

「甘いもの」

「ちよつ…まつ…はいい?」

「甘いもの、ちようだい」

……甘いもの……?……ああ、そういうことか。

「あーつと…、ごめん。家の喫茶店、今日はちよつとした用事があつて午前中は休みなんだよ。一応、午後3時ぐらいから開く予定だから」

「そう。じゃあ」

「……?」

「私を白糸台までつれていって」

「………はい?」

赤髪の少女ー宮永 照はどうやら白糸台高校へ向かう途中、迷子になってしまいフラフラと歩いていたところでのこの喫茶店を見つけ、偶然同じ学校の制服を着ていた僕を見つけたのだという。それを身支度を終えて出てきた久にも説明しー何故かは知らないが少しムツとした目で見られた。なんで?ー照、久と共にこれから通う白糸台高校に向かうことになった。

「とつても助かった」

「新入生同士助け合わないとね。……宮永さんも新入生?」

「……(コク)」

「ということは同級生ね。私は涼月久。んで、こっちの朴念仁は弟の澄夜。弟共々よろしく!」

「改めて、澄夜です。……というか、朴念仁はひどくないか……?」

「あなたはそれでいーの!」

「……さいですか……」

「ごちらこそ改めて…。私は宮永照、よろしく。後、私のことは照でいい」

「分かったわ。よろしくね、照。私のことも久でいいわ♪」

「僕の話は澄夜でいいよ」

パパッと自己紹介を終えたあとは学校に向かってのんびりと歩きつついろいろ話し合った。特に、同姓なこともあってか久と照はすぐに仲良くなり……

「あら、ということは照も長野生まれなの？」

「…?も」ということは？」

「僕や久も元々は長野出身なんだよ。…まあ、そのあと親と一緒に日本全国を飛び回っていたんだけどね」

「びっくり。世界は広いようでいて狭い」

うぐん無表情な人なのかなあ?あんまり驚いてるようには見えなけれど……いや、まあ、まて。ぴよこんとなった癖毛がぴこぴこ動いてる……。……なるほど、犬のしっぽと同じなのかな?

「ねえ、澄夜」

「うん?」

「私のこと、じゅつと見てるけれど……何かついてる……?」

「あ、いや、何でもない。気にしないで」

やってしまった!つい、いつもの癖が……

「全く……。澄、その癖、何とかならないの?」

「申し訳ない……」

「癖?」

「ごめんなさいね、照。この子、他人を結構じろじろ見るってうちよつと困った癖があるのよ」

「……へんたい?」

「断じてちがうからね!」

そんなことをぼちぼち話しつつ歩いているとようやく目的地が見えてきた。

「そろそろか……」

「さてさて、どんな高校生活が待ってるのかしらね。いやはや、楽しみだわ」

「そうだね。早めに昼寝ポイントを探しておかないと……」

「学食。甘いもの、いっぱいあるかな…?」

「……二人とも?ちよつと観点が違うんじゃないかしら?」

「いやいや、間違っていないよ。いい昼寝ポイントを早く見つけて、昼休みとか放課後時間あるときゆつくり寝たいじゃないか」

「いつでもどこでも寝れるのは澄だけよ……。ま、そのスペースはあたしも使わせてもらうのだけれどね」

「なんやかんや言っているけど結局使うじゃんか……」

「気にしない、気にしない♪」

「甘いもの……」

「というか照さんや?会ったときからそうだったけどずっとそればっかだよね?」

「甘いものは……大切だよ?」

何故か、家の駄目な元気な末姉と重なって見えるのは……気のせいでありたい……

「ま、そんなことより早く行きましょ。入学式、始まっちゃうわよ?」

「……だね。まあ、後々でもなんとかなるか」

「レッツゴー」

《せめてやるならもうちよつと明るく行こう（行きましょ!?!）》

そんなこんなで僕らは、三人賑やかに白糸台高校の門に入っていた……

side ??

——校門の喧騒から少し離れた棟のある一部屋

「いた……」

「へえ、あいつ早速女の子引つ掻やがったのか。ま、本人に自覚はないだろうがな」

「……なるほど、あれが先生の言っていた?」

「ふくん……。……ヤバイ、ストライクかも……」

「そう、あたしの愚妹と愚弟さ。……もう一人の奴は知らないがな。後、愚弟を狙うんなら覚悟しな。あいつは天然の優柔鈍感タラシだからな」

「あらら……ちよつち手厳しいかな？」

「今は、そんな話をしてるわけではないでしょう？それより、あの子……もしかして……」

「うん？何か知っているのか？」

「ええ……。もう一人の女子……。真意は定かではありませんが、噂の張本人……の可能性ががあります」

「ほほお……。つーことは、あれも期待株か？」

「はい、さらに闇情報ですが、経験は少ないのですが中々の腕前を持つ打ち手の情報もあります」

「そりゃあ、楽しみだ……。こつちも教育のしがいがあるもんだぜ」

「……………先生。本当に…本当に彼らが？」

「ふつ……。愚問だぜ。部長さんよ、何せ……」

「何せ？」

「家の愚弟は確実に……」

「……あたしやあいつよりも別格に強いからな」

side 澄夜

入学式も無事終わり、早速僕らが此れから学校生活を送ることになる教室に案内された。因みに僕、照、久は三人揃って同じ1—Bに入る事になった。久は、「いやあ……。偶然ってあるものなのね」って言うていたけれども、気心の知れた相手がいるって言うのは結構リラックスできるからいいって僕は思っている。にしても……

「どうしたの？照。なんか顔が少し青ざめてけど……？」

「……うかつだった……」

「？」

各々がすでに何人かのグループを作り、賑やかになっている教室の窓際の席を確保した僕らだったが（因みに席順は僕が一番後ろの席で、左に照、前が久だ）何故か照が頭を抱えていた。こころなしか癖毛もしゅん……としなだれている。

「照？どうしたんだ？」

「……………この学校、すごく広い……」

「確かに広がったわね。1学年10クラスあるし、特別教室の数も凄かったし、その教室一つとっても軽く50人以上入れるほど広いしね。でも、それがどうしたの?」

「……………ちやう」

「え……………」

「私が……………迷子になっちやう……………」

《……………》

「……………」

《……………はい?》

「……………あ、でも澄夜と久がいるから……………」

まさか……………この子、素で重度の方向音痴!?今朝、迷ってきたって言っていたけど、慣れ不慣れ以前の問題なのか!!?

「あくつと……………。とにかく、久」

「……………言われずともわかっているわ……………」

「よろしく」

長年、ずっと一緒に過ごしていただけであり、久も同じ考えだったらしい。つまりは

《この子には……………どちらかがついていないとヤバイ》

ということである……………。

もしかして一番おせわ……………もとい、目をかけていないといけない子と出会っちゃったかなあ……………と久と顔を見合わせていると階段の方からコツコツとこちらにやって来る足音が近づいてきていた。

「お……………。照、久。担任の先生、来たみたいだ」

「え……………?」「そうなの?分かったわ」

「……………照?」

「澄夜?えつと……………足音なんて……………」

「ん?……………ああ、来てるっていったってまだ「西側3階の踊り場のところ」だから……………もうちよと「まって!」……………?」

「照?……………あ」

「きこ……………えてるの……………?」

「うん。……………まあ、回りが賑やかだから集中しないと聞き取れないけれ

ど」

「……………」 「…あちやく…。素で会わせちゃった…………」

…?なんか照が呆然として……………」

……………」 あっ!?

「やっ!!照!?!あの、これは…………えつと…………」

ヤバい!!これは…………どう説明したらいいんだ!?

というか、もう教室の前に…………あれ?この足音の感覚…………聞き覚えが…………

そうこうしている内に教室のドアがゆつくりと開いて姿を見せたのは…………

「おはようございます。早速ですが皆さん、早く席について下さい」

…………えつ?

「…………えつ!?!」

教室の空気もピタリと時間が止まったかのように停止した。なにせそこにいたのは僕と久の姉にして、有名プロ雀士の……

…… 《夕羅姉ちゃああんっ (さあああん) <プロおお!?!>》

その後、朝日姉ちゃんに聞いたのだが僕らのクラスの驚愕の一声は、白糸台高校中に響きわたっていたそうだ。

……………

「突然、驚かせてしまい申し訳ありません。しかし、わたくし、涼月夕羅は本日から1―B:つまりはあなたの方の担任となります。新人故に何かとご迷惑をおかけすることがあると思いますが、よろしくお願ひしますね」

驚愕の波もある程度落ち着いた頃に、僕の姉達の中で一番、猫を被っている、物静かな姉、涼月 夕羅がひっそりと自己紹介を終えた。どうやら、おしとやかなキャラで行くらしい…………。

(おいおい…………俺たちすっげえ大当たりじゃあねえか!)

(雑誌でよく見ていたけど、やっぱり実物を見るとすっごく綺麗だよなあ…………)

(彼氏とかいるのかな?)

(ばっか……お前!前、いるって報道あっただろうが!)

(すごくスタイルいいね……)

(何か秘訣があるのかしら?)

(すごく綺麗な髪。どんなシャンプー使っているんだろ?)

(スーツが似合ういい女か……。あたしもそうなりたいなあ……)

ああ……哀れだ……。十中八九、家にいるところを見たらきつと幻滅、というか理想が崩れ落ちるだろうなあ……。とにかく、家にいるときはクラスメイトには会わせないようにしよ……。

クラスメイト達の夕羅姉ちゃんに対する羨望のひそひそ話を聞いて少し頭を抱えていると、夕羅姉ちゃんの一声からクラスメイトの自己紹介が始まった。

さて……どんな風に自己紹介したものか……。

というか、この席を選んだのは大正解だった。このぼかぼかとした日差しがとても心地よい……。……駄目だ、どんどん眠くなってきた……。

……よし、お昼寝たいm「てい」っふうっ!?

……お腹に横から鋭い一撃が入って危うく大きな声が出るところだったがなんとか堪えた。

顔を上げると、任務完了とでも言いたげにちよつとどや顔をした照とそれによくやった!!とサムズアップで答えながらニヤニヤしている久がいた。

そのまま怨みを込めて見つめて見つめていると……

「次は、澄くんですね。こちらに」

僕の番が回ってきた。

……まあ、いつも通り、パパッと済ませてしまおう。

夕羅姉ちゃんの声に返事を返し、教壇に立つ。その間に……

(澄くん?……誰だ?あれ)

(雑誌に乗ってた……彼氏さんじゃ無さそうだけど……)

(え?え?じゃあ、あいつ一体なにもん?)

(ヤバいよ!ヤバいよ!すつつつごいイケメン!!!)

(あれ?わたし、あの人どつかで……?)

(何!?何!?芸能人の人なのかな?)

(綺麗な銀髪……)

という、ひそひそ声が聞こえてきた。

まあ、ここは隠し事はしないつもりだ。夕羅姉ちゃんにハンドサインで聞いたなら、「いっていいよ」って口を動かしてたし。

「っと、初めましての人は初めましてかな?家の店に来たことある人とは初対面じゃないかもだけれど…。担任の涼月夕羅の弟の澄夜です」

(弟!?弟さんだって!?)

(確かに姉妹弟がいると言っていたけど、まさか同級生にいるとはね……)

(姉弟揃って美男美女!?羨ましいい〜!!)

(店………。あっ!?)

おお……いきなり大きな反応。そりや有名プロ雀士の弟ともなればこんなもんかなあ。

そんなことを考えているとクラスの女子の一人が早速質問してきた。

「はい!はい!!涼月君、お店って言っていたけど……それって?」

「学校より少し離れた小川沿いに、『黎明』っていう喫茶店があるでしょ?あそく」「キャー……!!!」

「うおっ!?!びっくりしたあ……」

「待って!!まだよ!みんな!!」

な、なんだなんだ?女性陣のテンションがいつきにあがって、立ち上がった人まで出てきたのだけれど……?

「そっ、そっ、そっそれ、それで……」

「ああ……」

なんか聞いてきた人もなんかどうもつちやっているし……

「それで……スイーツ、作られますか……?」

「そうだけど……?あ、よく家にスイーツを買いに来てくれる二丁目の奥さんが話していた「僕と同一年の娘」さんって君かな?雰囲気、特

に目がそっくりだし。いつもありがとね。今度、感想でも……。あれ……………」

なんか……………空気が……………固まってる？

咄嗟に夕羅姉ちゃんのほうを見ると「引っ掛かった♪引っ掛かった♪」というかのような満面の黒い笑み。そして、つつーと、冷や汗をかきつつゆっくり久の方を見ると……………」

……………「ドツキリ大成功!!」と書かれたノートをこちらに向け、清々しく綺麗な悪魔の笑顔を向けていた……………」

嵌められたあ!!と思ったと同時に再びーただし今回は女性のみだがー特大の驚愕、というよりは狂喜の一声が響き渡った……………」

因みに、その声は白糸台高校の敷地を飛び越え、近隣住民の方まで聞こえていなそうな……………」

side 久

「じ……………じぬう……………」

嵐が過ぎ去り、机にぐつたりと突っ伏した澄。

ああ〜やっぱ、澄のこの感じ。最高だわあ〜。やめられないわあ〜。やっぱいわあ〜。結構童顔なだけあって困った顔はとにかくやっぱいわあ〜。っぱいわあ〜。

あの自己紹介の後、共犯の夕姉さんが笑いをこらえつつもみんなをなだめ、続きを再開したのだけれど女子達は完全に心ここにあらずな感じで進んでいった。(因みにわたしのときも澄程じゃなかったけど歓声は上がった)最後の子が終わり、夕姉さんが緒注意を一通り話して今日はそのまま放課後となったんだけど……………」

ー夕姉さんが教室を出ていった瞬間、クラスの女子達が、雪崩のように澄のところに向かって来たのだ。

巻き込まれないようにあたしと照は避難したんだけど……………澄は性格上、他人の好意を絶対に無下にしないのが災いして女子一人一人に対し、丁寧に應對していった、何とか全員帰ってもらって今に至る。

「……………ひ……………ざあ……………」

「あ〜……………ちよつとやりすぎたかしら……………」

「……………か……………げん……………を……………」

「……………(ちよんちよん)」

「……………?」

「どうかしたの、照?」

「甘いもの」

「Oh……………」

「照…さすがにそれは追い討ちよ……………」

「先に帰って着替えてくる」

「じゃ、またあ……………。あー、一人で大丈夫?」

「う……………」

「仕方ないわね……………。ケータイ、持ってるかしら?」

「うん。……………でも、あんまり使わない」

「あるならいいわ。連絡先交換しましょう?」

「!いいの?」

「友達が迷子になったら助けてあげるのが普通でしょ?……………ついでにそこで灰になりつつある子のも教えてあげるわ」

「……………助かる。……………登録って?」

「予想はしていたけどそこものね……………。貸して、あたしがやるわ」

「ありがとう」

照から携帯を受け取り、あたしと澄の連絡先を入力する。その時、隣の燃え尽きた人が「こ……………じん……………」とかなんとかぼそぼそ呟いたけど、どうせ後で自分から登録しに行っただろうし気にしない。

「はい、登録できたわ。今日はこの後十中八九、澄は忙しくなって手が回らなくなるだろうから、連絡はあたしにしてね」

「わかった。……………ありがとう。じゃ、またあとで」

「はーい。またね」

この後の澄の甘味が楽しみなのか、軽くスキップしながら照は教室を出ていった。

「……………良かった」

「……………?」

ある程度復活したらしい澄が鞆を持ちつつ立ち上がりながら安心

したように呟く。

「照はいい子だから……そんな子が久と友達になってくれて良かったってこと」

「……………そうね」

「……大丈夫だよ。このクラスの人はみんないい人達だから……………ここにはもう久を苦しめる人はいないから」

「……………うん」

「……………それでも何かあったら……僕が君を守るよ。……………昔みたいだね」

「……………っ!?……………ま、まったくあんたってほんつとタラシだよね」

「……………何で?というかどうしたの?顔、真っ赤……………」

「あんたのせい!!」

「え、えええ……………僕、なんかしたっけ……………」

本当に澄は鈍感だ。超鈍感の唐変木。でも、それでもあたしはそんな彼に賭け、その賭けに勝って今、ここにいます。あたしが今のあたしであるのは、彼のお陰だ。

「とにかく!この話はおしまい!!それより早く行きましょう?朝姉さんが待ってるわ」

「それもそうだね。ただなあ……………」

「ふふっ♪そして〜さらにその後は〜♪」

「言わないで……………」

「御愁傷様ね〜♪」

「誰のせいだよ!?!」

「全く……………」と軽くぼやきながら教室を出る彼の背中。

あたしがちゃんと素直になつたら面と向かって伝える言葉はある。でも……………今はまだ素直じゃないから面と向かっては言えない。けど……

「……………ホントに、ありがとう」

「……………久、何か言った?」

「ふふっ♪なんでもなくい」

「??」

さて、何故あたしと澄がみんな下校しているなか教室に残っていたのかと言うと、朝姉さんから「ある場所に来てほしい」と頼まれていたからなのだ。

「でも、朝日姉さんからの頼まれ事って珍しいわね」

「うん。ただ、僕はある程度内容に予測がついているけど…」

「あら、あたしだってわかってはいるわよ？大体、あたし達の姉さん達が頼むといったら麻雀のことしかないでしょ？」

「それもそうだね……。つとここだ」

白糸台校内の中でも一番大きな建物の前にやって来ると、すでに入り口で朝姉さんが仁王立ちして待っていた。

ある意味、某警備会社の人より安心感があるわね……。

「朝日姉ちゃん！ごめん、待たしたかな？」

「いや、待ってねえぞ。むしろ、あんだけどでかい歓声が聞こえて、その元凶に心当たりがありまくるんだから多少は目をつむるさ」

「……ということは、朝姉さんは夕姉さんのこと聞いていたのね…」

「ああ。あいつが突然教員免許とるって言ったときには驚いたけど……。同時にお前らには黙っておくよう言われたし、元々今日、サブライズするつもりだったんだらうな……」

「……やっぱりあの人の影響なのかな？」

「さあな……。ま、今はそれはおいておこうぜ。あ、そういや……」

そういつて背後の建物に入ろうとして、すぐに朝姉さんが振り向きかけ、1度止まる。

「??」

「どうしたの朝日姉ちゃん？」

「1回目の歓声は夕羅が原因ってのはわかったんだが、2回目はなんだったんだ？」

「ああ〜♪それはね」

「あ〜……」

「……………皆まで言わなくていい……………。こうなったら、澄夜」
「うん？」

「お前は一旦店に行け。こっちの用事は久づてもなんとかなる」
確かに家に帰った後でもできる話というならばその方が効率がいい。さらに今日はあたしと夕姉さんのいたずらで澄が地獄のような忙しさになるだろうし♪

でもなあ、ちよつと複雑かなあ……………?ならば……………

「あーつと……………お願いしてもいい？」

「いいわよ♪ただし……………」

「ただし……………?」

「……………」
「後で『あれ』頂戴ね♪」

1—① END

第1局 狙撃主といたずら悪童と竜巻迷子と澄んだ
月―②

side 澄夜

今までこんな「黎明」に向かうのを嫌だと思ったことはない
……

「はああああ……」

深い深い溜め息をつきつつ、亀の歩みで「黎明」に向かっているの
だが……

「やっぱり行きたくないなあ……」

……でも行かないとなあ……。嵌められたとはいえ、スイーツ担当
しているのは事実なんだし……。何より

父さん達が作り上げた「黎明」の評価を壊したくないし……。

「……覚悟きめますか……」

そう呟き、俯いていた顔をあげる。その時、視界の端に気になるも
のが写った。

「…………？」

そこにはスラツとしていかにも真面目そうな凛とした女子がいて、
竹柵の向こうを眺めながら……

……ただ静かに、涙を流していた。

「…………」

竹柵の向こうは確か何かしらの道場だったような……。スカーフ
の色から見て同級生だけど、彼女はそこに何かしらの未練があるのか
な……？

足を止め、ぼんやりとそんなことを思っていると……

「趣味が悪いようだな」

その少女が竹柵の向こうを見ながら声を掛けてきた
。

「……ごめん。悪気は無いよ」

「……ならば一人にしてほしい」

「ごめん……………、それはできない」

「……………やはり趣味が悪いようじゃないか」

「いや、趣味とかではなく……………ただ僕は」

いつも、そうだ。

幼い頃からだつて、両親と全国を旅していた時だつて、そうだ。僕は……………

「ただ僕は泣いてる人を見過ぎすのはできない性分なだけだからね」

すると、一瞬目を見張ったがすぐに目を閉じ、涙を拭いた後、長い髪を優雅に踊らせながらこちらを振り向き、呆れたような目線に向けた。

「君は馬鹿なのか？」

「馬鹿つて……………心外だなあ。姉ちゃん達にもよく言われてるけどただアホみたい優しいだけだよ」

「……………やはり馬鹿じゃないか」

「馬鹿じゃないつて……………」

「いや、君は馬鹿だ。私みたいなのに構つて何が楽しい？」

「といつても……………僕は君のことを知らないし。楽しいかどうかは僕が決めることじゃないかな？」

「……………やはり君は馬鹿だ。涼月澄夜」

「さつきから馬鹿、馬鹿つて……………あれ？僕、名乗つたつけ？」

「いや、名乗っていない。ただかつて君がとある喫茶店で君が客と楽しそうに麻雀を打っていたとき、偶然聞いてしまったな」

「その喫茶店でもしかして『黎明』？」

「そうだ。よくわかつたな」

んん、ということとは家に来たことがあるのか……………。

でも、彼女の顔に見覚えはないから一緒に打つたことはないはずだ。だけでも聞いていたならば麻雀に興味があるのかな？

「えーつと……………」

「弘世董、I—Cだ。呼び方はなんでもいい」

「じゃあ、弘世さんで。それで弘世さんつて麻雀に興味あるの？」

「……………一応な。3ヶ月ほど前に友人から教わった程度だがな」

「なるほど……。ならさ……。――」

「――これから打ちにいってみない？」

side 堇

かつて、私は弓道を嗜んでいた。父方の祖父母から薦められて始めたのだが意外にも頭角を表し、全国優勝とまではいかなかったが全国大会決勝の常連にもなったほどだった。ただまさに高校からの注目が集まっていた中学最後の全国大会決勝で私は……事件に巻き込まれてしまい……… 私は――

――そこで終わってしまった。

どうしてこうなった……！

未練がましく、弓道場の方を眺めていたら通りかかった涼月にいつの間にか流していた涙を見られ、何故かそのまま「麻雀を打たないか？」と誘われ、共に雀荘に向かうことになった………のはいいんだが……。

「おい!!涼月!!」

「何!?!」

「何故私たちはさつきからあちこち走り回るはめになっているんだ!!」

「十中八九僕のせいじゃない!!久と夕羅姉ちゃんのせいだああああ!!!」

《待ってええええええつ!!澄夜様あああああつ!!!》

「な!?!さつきより増えてないか!?!あれ!?!」

「知らないし!!とにかく弘世さん走ってええ!!」

「!」

――何故か女子生徒の大群に終われるはめになってしまった。

▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽

事の起こりは数十分前に遡るのだが………

私が以前友人達と訪れた雀荘喫茶店「黎明」は涼月の自宅でもあ
るらしく、そこで打とうと言うことになった。

「ただ僕は日中、すんごく忙しくなるから相手は喫茶店の営業終わってからでもいいかな？」

「誘ったのは君だ。合わせる」

「ありがとう。助かるよ」

不思議なものだ……

涼月はそれなりに身長が高いのに加え、頭髪は銀髪という傍目から見れば不良とも言えもなくもない格好をしている。だが、彼が発する優しい雰囲気それがそれを完璧に打ち消している。

先刻、少し話しただけでもそれは分かった。彼は涙を流していた私に対し、その支えになろうとしている。どんな、事情があるか……それを一切聞かずに。

「なあ、涼月」

「何？」

「何故……聞かない？」

「？……ああ。泣いていた理由をつてこと？」

「まあ、有り体に言えばそうだ」

「うくん……。ならば、逆に弘世さんはその事を話したいのかな？」

「いや……。私は……」

「なら、僕は聞かないよ」

そういつて彼は優しい顔になる。

「さっきの君は何かに未練を抱えているように見えた。そこから察するに君にとって、とても大切なものからやむを得ず、離れなければいけなくなつた……つて感じかな」

あんな僅かな私の仕草、姿勢から一瞬でそこまで考えたことと、その考えたが的を射ている事の二つに驚きを隠せない。

しかし……。恐怖は感じなかった。

何故かはわからない。彼の雰囲気そうさせるのか、それとも彼ならば……。という謎の安心感からか、とにかく恐怖は感じなかった。

「ならば……。僕はその話を聞く資格はまだ持ち合わせていない。第一印象がどうだったかは分からないけれど、出会って数分の人間が聞いていい話じゃなさそうだしね。だから……」

「だから……?」

「弘世さんにとって、僕が本当に信頼できる人になったら話してほしいな」

そういつて涼月は桜吹雪の中、静かに、どこまでも優しげに笑っていた。

「……やはり君は……馬鹿だ」

「結局、馬鹿扱いか……」

「ああ、やはり君は馬鹿だ……大馬鹿だ」

「……いいこと言ったつもりだったんだけど……」

十分にいい言葉だったぞ。大馬鹿者。

口には出さなかったが心の中で感謝した。

……いかな。このままでは彼の優しさに溺れてまた泣いてしまいそうだ……。

……と、ここまではいい雰囲気だったのだ。 “ここまで” は……。

……そして、私達が校門に差し掛かった時、全てが……始まったのだ……。

「あっ……あのうっ……!涼月さん!!」

「ん?」「あれ?」

……事の始まりは顔を茹で蛸のように赤くした、たった一人の女子生徒ががちがちに緊張しながら声を掛けてきたことだった。

「君は……確か同じクラスの高倉さん……だったっけ?」

「は……はひい!!覚えていたただけましてでっすかつ!」

「尋常じゃないほど噛んだな……」

「あく……とにかく落ち着いて?ね?」

……そして、私が軽くツツコミをいれ、涼月が落ち着かせようとしたとき。

「いいいやっ!大丈夫でしゅ!!……そそそんんなな、こおあとより!!涼月しゃま!!」

「私は眼中になしか……ん?涼月 “様”?」

……彼女は……とんでもない爆弾を落とすのだ。

そんなことを私は言おうとした。しかし、その瞬間――
――涼月の雰囲気ですうつ…と変わった…：気がした。

「すず………つき………？」

「僕から離れないで」

私の耳元で涼月は小さく呟く。

まてまてまてまてえ!?!近い近い近い近い近い!!?!?

涼月は銀髪に相まった端正な顔をしているのだが、年頃の女子にとってこれはきつい!!しかも結構ガツチリとした腕に抱き止められてるから逃げれない!!

頭の中が大混乱中の私は……とにかく早く終わってくれと願うことしかできなかつた……。

「よし……いなくなったかな……？」

よ……ようやくか……。

あの後、私はずっと涼月の腕の中におかれていた。涼月によればあの女子集団は数分ほど近くを搜索し、諦めて戻っていったらしい。

……その数分が私には何時間にも感じられたんだがな……。

「ごめんね、弘世さん。巻き込んだじゃって」

「い、いや……それよりもだな……」

「うん？」

「……そ、そろそろ放してくれないか？」

「………あ」

涼月はここでようやく私を抱きしめてることに気付いたようだ……。

「ご、ごめんー」

少し頬を赤くした涼月が慌てて離れる。

………まあ、あの集団に巻き込まれていたらどうなっていたのかわからないし、この件は不問にしておこう。

「……恥ずかしかつたが、気にするな……」

「う、うん………」

「……………」

「……………」

さすがに……………気まずいな……………。

だがそれよりも気になる事がある。さっきは混乱していてそんな余裕はなく……………今もあるとは言いがたいが……………、それでも気にかかるとある。

——あれだけの人数の前からちよつとした脇道に隠れただけで見過ごされることなんてあるのだろうか……………?——

「と、とにかくさ、早く『黎明』に行こう」

「そ、そう……だな……………」

……………先程、確かに涼月の雰囲気が変わった。それが原因の一つであることは確かだ……………。しかし……………

『弘世さんにとって、僕が本当に信頼できる人になったら話してほしいな』

本当に信頼できる人……………か……………。

なら、私もその言葉に従うことにしよう。……………先程のことは彼にとって私が「本当に信頼できる人」になった時、問いただすとしてよ——

そんなこんなで先程の女子集団に見つからぬよう裏道を通りつつ重い足を引きずるようにして歩き、何とか『黎明』に辿り着くことができた。

「ほどほど……………疲れた……………」

「……………誰の……………せいだ……………くしゅん!!」

うう……………春先とはいえ……………汗だくになった後は冷えるな……………。

「……………まずはシャワーだね……………。……………弘世さんも浴びていつ……………」

「……………お言葉に甘えさせてもらおうか……………」

「じゃあ……………こつちが玄関だから……………」

そして、裏手に回り涼月が家の扉を開いた——

——「ただい」とおくやあくつ!!おっ帰りいくつ!!」!?

刹那、突っ込んできた何かは涼月の腰辺りに直撃し、涼月が吹っ飛んだ。

「涼月!？」

「あれ??」

「だ……から……だい……ぶは……だめ……だ……って……（がくっ）」

「すっ……涼月いいっ!？」

「ふう………。シャワー、ありがとうございました」

「ん〜！気にするな!!」

「星莉奈、あなたは少しは反省しなさい？また朝日姉さんの折檻を受けたいのかしら?」

「うにゅっ!?!?そっ、それは嫌だぞ!!?」

「だったら反省することね。弘世さん……だったかしら?制服の方は今、洗濯しているけど……貸した方は大丈夫?」

「はい、お陰さまで……といつてもちよつときついですが」

飛び出してきた人物——星莉奈さんと私の声を聞き、その後ろからやって来た星魅さんと共に伸びてしまった涼月を部屋まで運んだ後、私はシャワーを浴びさせてもらった。

「おー！なんかモデルみたいだな!!」

「いえ……そんなことは……」

実際借りたのはシャツとハーフパンツなのだが……少しサイズが小さいからか、どこかの小説で読んだ大きな日本刀使いの聖人と同じような格好になってしまった。

ううむ……少し、恥ずかしいな。

「すごいスタイルいいのね……とところで」

「……?」

「あなた、もしかして澄夜の彼女さん?」

「なあっ!?!ちつちつちつがいます!!」

「あら、そうなの?てつきり昔の友達の一人かと思ったわ」

「えつと……私と涼月は初対面です。なんというか……その……彼の……」お節介でしょ?」……まあ、そうです」

「まったく……相変わらずなんだから」

呆れたように溜め息をつきつつも、優しい微笑みを浮かべている星魅さん。

「というかだな……」。[涼月]という名字は珍しいからまさかとは思っていたが……、本物の有名人一家じゃないか!!」

先程から「何かポーズしてくれ!!」とはしゃいでいる星莉奈さんは、去年大学在学中にプロ入りし、新人王等の各賞をかつさらっていった今後の期待も大きい新星プロ雀士だし、「写真、撮ってもいいかしら?」とカメラを構えている星魅さんはフリーながらも各プロ集団から多大な信頼を得ているスカウトマンでありつつも、麻雀界の現状を様々な観点からの確に見抜いた人気記事を作成する有名記者だ。

「いや、さすがに写真は……」

「残念……。く〜♪〜♪〜と、少し失礼するわね」

今の着信メロディという……確か……

「夕羅姉さん?どうかしたの?」

やはりか!?涼月夕羅ともなれば、国内無敗とされた小鍛冶健夜プロと唯一対等に打ち合い、彼女に何度も打ち勝った事がある程の超有名ベテランプロ雀士だぞ?!」

「あら……。そんなことが」

「……………」

「そうね……。朝日姉さんも帰るのは少し遅くなるって言っていたし、人手不足は否めないかも」

「……………」

「どうしたもの……あ」

有名人のオンパレードに唾然としていた私の方を見た星魅さんがこちらを見、何かしらに気づいたような声をあげた。

一体、夕羅プロと何の話しているのだろうか?……嫌な予感がしないでもないのだが?

「夕羅姉さん。こっちは大丈夫かもしれないわ」

「?—————?」

「ええ。—————」

「—————丁度良いところに手空きの子がいるのよ」

こちらを見てニヤリと笑う星魅さん。

……………これは……………逃げるべきだろうか?

……………いや、逃げてでも逃げ切れるのだろうか?

side 澄夜

「いっ……………つつう……………」

うー…直撃を受けたお腹がまだ痛い……………。今朝、あれだけ朝日姉ちゃんから折檻受けたって言うのに…………。まあ、今回は僕も走り回って疲れきっていたって事もあるから一概には責められないかな?

……………やっぱり甘過ぎるのかなあ……………?

そんなことをベッドに寝転がりながらぼんやり考えていると、

「……………そういや、さつきっから下が賑やかだな」

いやに下が賑やかなことに気がついた。

さつき時計を見たけれど喫茶店の開店の時間はもうちよつと先なはず。……………そもそも、僕が伸びちゃったから開店の時間はもう少し後になっていたかも。

とにもかくにも、まだお客さんが来てる……………可能性は十二分にありますね。ハイ。

「……………急がなきゃ……………」

すぐさま飛び起き、学校の制服から店の制服に急いで着替える。もちろん走り回されたから体をふくのを忘れずにと。

そして、姿見で素早くおかしな所がないか確認して部屋を飛び出し、転げ落ちるようにリビングへ!

「ごめん!!気絶して……………た……………え」

《あつ……………》

……………えーつと……………。

飛び込んだりビンゴでは、何故か、満面の笑みとなっている姉二人に強引に服を脱がされかけ、涙目になっている弘世さんがいた。

……………弘世さんて、スツゴくスタイル良いんだなあ
……………じゃなくってえ?!?!?
「ごっ!?ごめっ!!」

「きっ……………キヤアアアアアアアアアアッ!!」

「ちよおっ!?!トレイはかんじゅごっぐう!!?!」

一瞬でパニックなつてしまった弘世さんが投擲したトレイが寸分
違わず頭部を直撃した……………。

「おおー！なんとも綺麗に直撃したな！」

「そんなこと言っている場合じゃないでしょう?……………あくあ……
澄、また伸びちゃった」

「はあ……………はあ……………はっ!?!涼月!」

呑気な姉二人と正気に戻り、慌てる弘世さんの声を聞きつつ僕の意
識は闇へと沈んでいった……………。

「本当にごめん!!」

「い、いや……………私も気が動転していたとはいえ悪いことをした……………申
し訳ない」

今回はほんの数分で意識が戻り、すぐさま弘世さんに謝罪した。
慌てていた(＋強制的だった)とはいえ女子の着替えの場に入
ってしまったのだ。もう平謝りしかない。

弘世さんもそこを汲み取ってくれて、許してくれた上に彼女自信も
非礼を詫びてきた……………

……………家の喫茶店の女子用制服姿で。

しかも、ただの制服ではなく……………

……………俗に言うメイド姿で。

「……………あ、あまり見るな……………」

「あぁ……………うん……………」

そうなんです。家の女子の制服は何故だかメイド服なんです。

理由については……地元、長野にいるらしい父さんの友達のおじいちゃん「雀荘も良いが喫茶店、しかもメイド喫茶店とかも良さそうじゃないか」とかなんとか言ったらしく、それに父さんと友人が悪のりした結果、こうなってしまったらしい。……ちなみにその友達も長野で雀荘喫茶店を開いた……と言うより、そのおじいちゃんが営んでいた雀荘を喫茶店と合体させたらしいんだけど、その女子の制服もメイド服らしい。

……父さん曰く、『メイドは漢のロマンだ!!』とのこと。
……僕には微塵もわからないけどね……。
……まあ可愛い制服だなあとは思っても。

「~~~~~ツ!!」

「あいてっ!」

そんなことをぼんやり思い返していた時、顔が真っ赤になった弘世さんから軽くチョップされた。

……また、やってしまった……。さすがに恥ずかしくている女子を見つめ続けるのは駄目でしょ……。

「……………」

がつくりと肩をおとしていると、今度は弘世さんが僕のことをじいっつと見つめ始めた。

「え、えーつと……………」

「君……………」

う……………うわあ……………うわあ……………見つめられるってこんな感じなのかな?なんだか全身がむずむずしてくるし……………かなり恥ずかしい……………。

「…………ど、どうしたのさ一体?」

「いや、君の左目……………」

「……………」

「いや気のせいならいいんだが……………少し青みがかってないか?」

「あ〜」

なるほどね……………。これに気づいたからじっと見つめてきてたのか。というか、これに気づくって弘世さんが結構目が良いのかな?

「気にさわったか?」

「いや、大丈夫だよ。で、左目がちよつと青くなっていることなんだけど……」

さすがにこれは大きな声で話す内容ではないから少し声を潜める。

「実は……左目だけ少し色がぼやけて見えているんだよ」

「ということは……」

「そ、軽い色盲。日常生活に支障は全くないけれどね」

「色盲……」

「まあ、「ちよつとした事情」があつてね……」

「あれ」はまだ使う事はないだろうし……。しばらくはこれが悪化することはないはずだとは思うけれども。

「これについては家族も知っているし、先生方にはもう伝えてあるけれども……同級生達には言わないで置いてほしいな」

「当たり前だ。……すまない、少し踏み込み過ぎたな」

「大丈夫だよ。弘世さんが気にすることじゃない」

「そう言ってくれるとありがたい。…………とところで、だ」

うん?

「涼月。話が大きく変わんだが……一つ聞きたいことがある」

「ハイ?」

「君のお姉さんの一人……夕羅さんと言うのは…………」

「夕羅姉ちゃん?」

「まさかとは思うが……小鍛冶プロの…………?」

「ああ、確かに夕羅姉ちゃんとかやちゃんは親友でありらえば……」や
はりか!?!」おわあ!?!」

「やはりあの『幸運喰い<ラックイーター>』涼月夕羅なのか!?!とい
うか、小鍛冶プロとも仲が良いのか!?!」

「ま、まあ……一応。というか……弘世さん落ち着いて?」

なんか久しぶりに聞いたな『幸運喰い』。というか、詳しいな弘世
さん。

『幸運喰い<ラックイーター>』というのは、夕羅姉ちゃんのスタ
イルから名付けられた2つ名にして夕羅姉ちゃんの「オカルト」って

いう「能力」の名前。

さてこの「オカルト」についてなんだけど、これは特定の雀士が持つ「能力」のことなんだ。「能力」というのは「オカルト」ともう一つ「デジタル」という分類があつて、「オカルト」系はさらに様々な「型」へと分類されることがある。

それで夕羅姉ちゃんの「幸運喰い」なんだけれども、これは「オカルト」系の支配型の能力に分類される能力。大まかに言うとなんか放銃した相手の運を「喰べ」、自身の糧にしてしまうというもの。

結構えげつない能力なんだよねこれ。なにせ安手でも振り込んでしまったら最後、あれよあれよというまに夕羅姉ちゃんの餌食となる。

もう一つ、小鍛冶プロっていうのは夕羅姉ちゃんの親友にしてライバルの日本最強とも言われたプロ雀士。今は夕羅姉ちゃん共々最前線からは身を引いているけれど、実力はまだまだ衰えていない。ここ最近朝日姉ちゃんと一緒に解説やったり、ラジオのメインキャストとしての仕事がメインらしい。忙しい合間を縫っては家に顔を出してくれて結構仲良くなっただけだ……ただなんというか………何故か僕を見る目付きがどこか怖いんだよね………。

なんでだろう？

「っ!?……すまない……。超有名人を前に大分興奮してしまった……」

「まあ、姉ちゃん達のことを聞いたらそうなるさな」

「……ということはやはり……?」

「そ。星利奈姉ちゃんは『零動超速<ゼロドライブ>』の涼月星利奈その人だよ」

「………とんでもないお姉さん方じゃないか……」

星利奈姉ちゃんの2つ名にして能力『零動超速<ゼロドライブ>』。「オカルト」系、自己向上型に属するこの能力の特徴は、点数関係なく、とにかく最速で和了る『ことに特化しているということ。ただ、何回か和了って自身の『ギア』を上げていかなければ真価を発揮できないし、運が悪いと安手ばかりになったりもするし、1度止めら

れてしまうと再発に時間が掛かるっていう隙の多い能力だ。

でも1度勢いに乗るとそうそう簡単に止めることはできなくなり、一方的な試合展開ができる強力な能力。

「なんだけでも……………。我が姉とはいえ、星利奈姉ちゃんはちよつと…………いや結構?…………とにかく幼稚なところが多いからすぐ読まれちゃうんだよね……………」

「澄、弘世さん。そろそろお店開けるから準備の方、よろしくね」

「つと…………わかったよ、星魅姉ちゃん」

星魅姉ちゃんに呼ばれて時間を見ると、確かにそろそろ開店する時間帯だった。

「といつても僕の準備は大体昨日の夜に済ませておいたし…………開店までに追加で何個か作っておこうかな?」

「それより…………私はどうすれば?」

「…………その格好してるから薄々察していたけれど…………」

「……………まあ……………」

大方、夕羅姉ちゃんから何かしらの連絡があったときに巻き込まれたのかな?とにかく…………

「…………麻雀はまた今度しよう。今日は星利奈姉ちゃんと一緒にフロアの方をお願い」

「わかった」

「そう言葉を交わし、店の方へ向かおうとしたところで」

「……………なあ、涼月」

最初出会った時と同じ様な雰囲気になって俯いてしまった弘世さんに呼び止められた。

「?」

「……………麻雀こそできなかったが、君のお姉さん達と話すことができたお陰か、気が軽くなった。……………ありがとえな」

「僕はなにもしてないよ?」

「いや、今日あの時、君が話しかけてくれなかったら私はもつと…………あの事に未練を抱えていただろう」

「ん?そんなことはないと思うよ。例え僕が話しかけなかったとし

ても弘世さんはすぐに前を向いていたと思う」

「そんなこと……」

「そんなことあるさ。確かに今日、弘世さんは泣いてたけどさ……その瞳は力強くて、ちゃんと前を向こうという意志があった。だから……今日僕がしたことはただのお節介……というか厄介ごとくに巻き込んだじゃっただけか？……まあとにかく、ただ僕は……僕をしたいことをしただけだよ」

そう……これは僕の生き方。そして……ただの……

「……罪滅ぼしでしかない。」

「……決めた」

少しの静寂の後、ポツリと弘世さんが呟き、俯いていた顔をあげて僕をしつかりと見る。

「涼月……いや、澄と呼ばせてもらおう……。今はまだ出会ったばかりだからか、『君にとつて、私が本当に信頼できる人』になつたら君の背負っているものを……私にも聞かせてくれないか？」

「!?……なんだか弘世さんには敵いそうもないなあ」

「私のことは董でいい。……今日はとにかく目の前のことを片付けるでしょう」

「……じゃあ、スウで」

「何故略す!？」

「さ、そんなことよりちやつちやつと仕事にかかろうよ。あ、分からないことなら星利奈姉ちゃんに聞いてね。星利奈姉ちゃん、フロアの仕事ならばプロ並みだから」

「ちよつと待て!?さすがにそのこつ恥ずかしいあだ名をどうにかするべきなんじゃないのか!!」

「前向きに検討しておくよ」

「絶対変えないやつじゃないか!それ!!」

さすがにあだ名で呼ぶ理由は言うつもりはないが……名前が似ていると根本的などころで似るのかな……?

……………元気かなー………「スミちゃん」
そんなことを考えながら僕はいつもの厨房へと足を向けたー……

1 | ② END

第1局 狙撃主といたずら悪童と竜巻迷子と澄んだ月―③

side 照

さて。私、宮永照は今日から高校生になった。

そして初日ながらも、久と澄夜君という友達ができた。

しかもなんと、澄夜は私の生き甲斐とも言えるスイーツを作るのがとても上手と聞いた。他のクラスメイトの反応を見るにその腕は確かなのだろう。

さらになんとなんと、彼の家である喫茶店で私にそのスイーツを食べさせてくれるみたい。すばら。実にすばらだ。

ルンルン気分で家に帰りお母さんにその話をした後、すぐに着替えて意気揚々とそのお店を目指し家を出た――

「歩いて」

「結果……」

「……さて……」

「……ここは一体どこなんだろう??」

まず、右を見る――普通の住宅街。目印はない。

そして、左を見る――普通の住宅街。目印はない。

さいごに前後――普通の住宅街。目印はない。

「……」

まあ待とう。一旦落ち着こう。ここで慌ててしまったら駄目だ。

いつもの二の舞だ。そうだ、携帯だ。ここで文明の利器の出番じゃないか。久と澄夜の連絡先があるじゃあないか。これで万事かいけ……

……そうしてバッグから取り出した携帯には「バッテリーがなくなりました。充電してください」の表示。

「……」

余りの事に呆然としている私をよそに、私の最後の希望（携帯）は

そのままブラックアウトし……うんともすんとも言わないただの薄っぺらい荷物に成り果てた。

「……………」

……まだだ。まだ、慌てるような時間じゃない。

そうだ、戻ればいいのださつき来た方へ……………」

「……………」どっちから来たんだっけ？
……………」

……よし。

「甘い匂いがする……うちに言ってみよう……………」

……………」

……………」結果……………」

「……………」

……………」何故か白糸台高校にたどり着いた。

どうしてこうなった？大体ではあるが2、3時間は歩いたはずだ。

確かに……確かに途中であんまんや駄菓子とかを食べ歩きはした……というか今も商店街のおばちゃんくれたおもちを食べているのだけれども……。それでも何故学校に来ちゃったのか？途中、何か女子の大群が誰かを追いかけていたようだけど、それを避けたのが不味かったのだろうか？ともかくそろそろ日も落ち始めているし……………」

「……………」

結局、私はおもちをくわえたままおろおろするしかない。

今日は入学式と言うことで学校に生徒は残ってない……残ってたとしても、話しかけづらい……。しかも携帯はバッテリーがないときた。さらには、タクシーやバスを使おうにも色々買い食いしちやっかせいもあつて、お財布がすつからかなのだ……………」

……………」そう、今の私は帰ろうにも帰れないのだ。何せ下校の時もマップに頼りつきりだったし……………」

「あう……………」

打つ手がなくなり、おろおろ……おろおろ……としている……………」

「何してるのよ……………照」

私に呆れたような声をかける救世主（久）が現れた……………。

「は〜っ……………は〜っ……………。ああ〜もう笑い疲れたわ〜……………。ポンコツな子かなとは思っていたけどまさかここまでなんてね〜」

「ぽ……………ポンコツじゃない……………」

「方向音痴なのは仕方ないとしても…携帯の充電を忘れた上に、スイーツの香りの誘惑に負けて所持金ほぼぜ〜んぶはたいちやったのは誰かしら?」

「う……………」

久は用事があつて学校に残っていたみたいでそれが一通り片付き、これからまさに帰ろうとしていたところだったらしい。そして校門で何故かおもちをくわえたままおろおろしていた私を見かけて声をかけた……………とのこと。

その後、〃黎明〃に向かいつつ何があつたのを洗いざらい話したら、久は大爆笑していた。

……………そんなに笑うことはないと思う……………。

「それにしてもそんなにスイーツ食べた後でも大丈夫なの?」

「ん……………。甘いものは別腹だから」

「後で後悔しても知らないわよ?特に澄のスイーツは絶品なんだから」

「澄夜のスイーツはそんなに凄いの?」

「ええ、そりやもう凄いわよ。何せ、お客さんの中には半ば中毒状態の人がいるほどだし、ちよつと前にこつそりネットショップに出してみたらさ……………数日後にはとんでもない値段がついて落札されてた」

「おお……………」

「ちなみにそのサイトのコメント欄に某有名料理評論家のあの人もコメントしてたんだけど……………」

「その人……………確かこの前、引退しちゃったよね?私、あの人の評価を色々参考にしていただけ……………。それでどんな評価だったの?」

「……………料理評論家をやめるって書いてあつたわ。因みに今もその人は

家の常連よ」

衝撃の事実が判明した……！まさか巷を一時騒然とさせた引退騒動の原因がまさかの彼とは……！！

一体どんなスイーツなのだろうか……。これは期待が高まる……！！

「おお……すんごいキラキラしてる」

「久……早く行こう……！！」

「はいはい。……なんだかポンコツというよりはちっちゃい子供みた
いね」

最後の久の台詞は聞かなかったことにして私たちはその後も雑談をしながら「黎明」に向かった。

—————

「久、こつちから甘い匂いがする……」

「こくら！！駄目でしょ！！これから食べるんだかる我慢しなさい！！」

「我慢………すない」

「すないって何?！」

side 久

「イラシャイマセ……」

「あら?」

「……おお、とってもいい匂い……」

校門でおもちをくわえたままおろおろしていた照を捕まえ、その後は簡単に甘い香りに誘われる照の気を何とかそらしつつ、やっとこさ着いた「黎明」に入り店の状況を確認していると（意外にも店内には女子生徒が5、6人いるだけだった）、見知らぬ女子が家の制服を着て接客してきた。……ガッチガチに固まった笑顔で。後ろの妖怪「無限甘党」はそんなの一切気にしてなかったけど。

「あなた……新人さんかしら?」

「モウシワケナイノデスガゲンザイハタイヘンコミアツテオリ……」

あらら……。緊張しすぎてロボットみたいになってるし、死んだ魚の目になってるし、私の声も届いてないわ……。もったいないわね、

深い青髪ロングでスタイルよし、顔よし、雰囲気よしの三拍子整った美少女なのに……。

「お!!おかえり!!」

そんなロボット青髪の子の後ろからぴよこつと利奈姉さんが顔を出した。

「ただいま、利奈姉さん。意外に混んでないわね」

「んにゃ!!一時前にはてんやわんやの大騒ぎさ!!星魅が言うにはここ3ヶ月分の売上を越えたそうだ!!」

「あら、それはまたすごい売上。ちなみに澄は？」

「裏で真っ白に燃え尽きてる!!」

「モウスコシシタラオセキガアキガデキマスノデ……」

「後ろの子も客か??」

「ええ、そうよく、澄に話せばわかると思うわ。それであたしが手伝う必要はある?」

「もうピークは過ぎたし大丈夫だ!!では2名様ご案内!!」

「イラシヤイマセ……モウシワケナイノデスガ……」

ぶっ壊れたロボットののように一定の台詞をリピートしている青髪の子は一旦そのまま放置しておいて、あたし達は利奈姉さんに案内された窓側の席に着くと水とおしぼりを取りに行った利奈姉さんと入れ替わるように疲れきった澄がやって来た。

「おかえり、久。そしていらっしやい、照」

「ただいま♪にしても若干やつれたかしら?」

「ん。……澄夜、大丈夫?」

「まったく……誰のせいだと……。まあ、家の売上が凄いことになったから感謝はしてるけど、それで心配してくれてありがとね、照」

「ふふん♪存分に感謝しなさい♪♪」

「ははっ、腹立つな。はいこれ、メニュー」

「ありがと。……おおすすめの数スイーツ……」

もらったメニューを見たたん、照の瞳が輝き出した。ついでに癖毛も凄い勢いで動いている。

そりゃあそうでしょ。何せ家の澄のスイーツのレパートリーはそ

これらの下手な喫茶店とは格が違うし、そのどれもが格別に美味しいというのだから文句の付けようがない。

澄っていつそのこと、パティシエになったらいいんじゃないかしら？

「そういえば……。ねえ、澄？今受け付けに立っている青髪の子は？」

「あく……スウのこと？」

「おやく？やけに親しげじゃない？」

「ん、まあ……色々あってね。詳しいことは後でいいかな？」

「ま、大体の予想はついているのだけれどもね。どんな言い訳をしてくれるのか楽しみにしているわ♪」

「言い訳じゃないよ……」

「……決まった」

そんなことを話しているとメニューとにらめっこしていた照がようやく顔をあげた。

「お、じゃあちよつと待ってね……メモ出すから……。……はい言っているよ」

「えと……ストロベリーパフェにクリームチーズケーキにバナナチョコカスタードクレープにりんごカスタードシユークリーム10個にアップルパイに……」

「……へ??」

「照！ストップ!!ストップ!!あなたお金ないんでしょう!!」

「あ……そうだった……」

「いやいやいや……それ以前にそんなに食べれるものなの？」

「？お菓子は別腹だよ？」

「さつきもそう言ってたけど……。……今言った量だけでも尋常じゃないわよ!?」
「一体どんだけ食べる気なのよ!?」

「お腹一杯になるまで」

「普通に太っちゃうよ!?"とにかく……。クレープだけでいい？」

「えく……」

《えく、じゃない!!》

結局、照はふてくされながらバナナチョコカスタードクレープと

アップルパイとパインジューズを注文した。

「はあ……それで久はどうする？」

「あたしはさつき頼んだ『あれ』とアールグレイで」

「……………」

「了解。それじゃちよつと待っててね」

注文を受け厨房に引つ込む澄にひらひらと手を振って見送った。そのあと、水とおしぼりを持ってきた利奈姉さんに照のことを紹介したら、二人とも気があつたらしく……

「星利奈さん……いえ、師匠……!!」

「師匠……師匠か!!素晴らしいじゃないか!!同志、照!!!」

なんてことをやっていた。

静かな照と賑やかな利奈姉さん……相対的な二人だけでもスイーッただけでここまで気が合うなんてね。なんだか意外……でもないのかな？

そんなやり取りのあと、利奈姉さんは他のお客さんに呼ばれて注文を取りに向かった。

「……ねえ……久」

「ん？どうしたの照？」

「この人たちは……皆凄い人ばっかだね」

「あら、あまりリアクションはなかったのだけれども……気がついていたの？」

「うん……………。私のお母さんも……そうだから」

「へえ……」

でも……宮永性の有名人なんていたかしら？照の様子を見る限りまだあたしが聞いていいような話じゃないわね。今はまだ……ね。

照もまだ話す気はないみたいでそれっきり口をつぐんでしまった。ただ……ほんの少しだけ……ほつとしたというか、同じような人がいて安心したような瞳をしていた。

その後は特に何事もなく照と雑談をしてのんびり過ごしていると両手にトレイを持った澄と、先程まで接客していた青髪の子がやって

来た。

「はい、お待ちませ。照のバナナチョコカスタードクレープとアップルパイとパインジュース。それと、久の僕お手製パンケーキとアールグレイね」

「！きた!!」

「ちよつと遅かったわね。何かあったの？」

「いや？星魅姉ちゃんが『久達と話してきていい。今日はもう終わりにするから。後、弘世さんもつれていってね』って言われたからついでに追加で作ってきたんだ」

「……………そういうことらしい」

青髪の子ー弘世さんはそう言って近くのテーブルを私のテーブルに隣接させ、その上に澄が色とりどりのスイーツを並べる。

「ひやく。結構作ったわね」

「このスイーツと久達が頼んだスイーツの代金は払わなくていいってさ」

「！ほんと!?!」

「ああ、私も聞いたのだからどうやら今日の売上はとんでもないことになったらしいな」

「良かったわね照。お財布、すつからかんにならなくて」

「うん、良かった」

「ここに来るまでになにがあったのさ…………」

そう言いながらエプロンを外しながら席に着く澄と弘世さん。

「まあ、今回は僕と久の入学祝いも兼ねているらしいからね」

「と言うことは…………乾杯でもしてみる？」

「……………」

「…………すでに宮永…とやらがすでにパイにかじりつこうとしているのだが…………」

「はやっ!?!」

「スイーツとなると凄い反応みせるのね…………」

「…………む？」

「あゝつと、照さんや?」

「……？乾杯、やる？」

「……なんともしまらないが……やろうか。掛け声は誰がやる？」

「ここは、こんな美少女達を侍らしている澄が適任でしょ♪」

「いや……侍らしてはないんだけど……？」

「どうする？私がやろうか？」

「…早くやろう」

「いいよ、僕がやる」

「なんやかんや言ってやってくれる澄、大好きよ♪」

「ハイハイ……。こほん！……ええつと、みんなそれぞれのグラスは持ったね？……それじゃ、みんな白糸台入学おめでとう!!それと……」

「なんの捻りもないんだな」

「なんの捻りもないの？」

「……ちよつとつまらない」

「うっさい……とにかくこれからよろしく!!それじゃあ……」

「—————乾杯!!」

「—————《乾杯!!》」

そして4つのグラスが軽く触れあう音が店内に響いた—————

「な……なんだ……これは……」

「（フリーズ中）」

澄のスイーツ初体験の2名は見ものだった。

弘世さんはこの世のものではないものを食したかのように驚愕の極みだし、照に至ってはパイ1つ食べ終えた姿勢のままフリーズを起こしてしまった。

「?……もしかして、口に合わなかった？」

「い、いや……そんなことあるわけないだろうが!?それどころか……旨すぎるだろこれ!!」

「（フリーズ中）」

「て、照?生きてるのかしら?」

「私も色々な甘味を食してきたがこんなに美味なものは初めてだ!!」
「そっか……!ありがとう、スウ」

照は相変わらずフリーズしたままだけど、弘世さんは何とか落ち着きたみたい。まだ若干興奮ぎみだけれども。

うくん?ちよこつと試してみようかしら♪

「えくと、弘世さん……だったかしら?」

「ん?……ああ、君が澄の義姉で同級生の涼月久か。弘世董だよろしく」

「あら、あたしのことは聞いていたのね。改めて涼月久よ、こちらこそよろしく頼むわ。弘世さん」

「私のことは董でいい」

「なら、あたしのことも久でいいわよ♪……それで董ちよこつとこれ食べてみてよ」

そう言っであたしはパンケーキをほんの少し切り分け、董の皿にのせた。

「パンケーキ?」

「そつ。とにかくなにも聞かずに食べてみて♪」

「先ほどの甘味で思い知ったが……もう驚かんぞ……。あむつ。っ!?!?」

パンケーキの切り端を口に入れたとたん、董もフリーズした。

心なしか、董の回りに天使が舞ってるような気がする。

「(フリーズ中)」

「スウ?」

「照にも食べさせてみよ♪えい♪」

「ん……んくつ。っ!!!」

「あ」

「て、照う!?!ちよ!何やってんのさ久!!何か照、真っ白になっちゃったよ!?!」

「いや。二人がここまで面白い反応を見せてくれたから、澄の特製パンケーキ食べさせてみたらどうなるかなあ。って思ったのよ。……てへ☆」

「『てへ☆』じやなあいつ!!照!スウ!しつかり!!」

「っは!?!」

「っ!!」

「あ、もどっ「澄!?今のパンケーキはなんだ!!!」「澄夜!今のパンケーキを後100枚ぐらい頂戴!!」待てい!!」

そう。あたしが頼んだ「あれ」こと澄特製パンケーキ。実はこれこそが某人気料理評論家を引退に追い込み、ネットショップで超プレミアがついた料理なの。今は特定の常連さんにしか出していないけれど:結構手軽に作ってくれるみたいで頼みこめば初見さんでも出してくれるけど:十中八九、このパンケーキの虜になる。

ちなみに、澄が言うには「普通に作ってるだけなんだけど」とのこと。何でここまで美味しいものになるかは本人すらわかっていない。

「100枚今からは無理だっ!!」

「お願い!!何でもするから!!」

「ん?今何でもするって言ったね?」

「何で久が反応するのさ!?!」

「おい澄!このパンケーキはなんだ!!一体何を使った!!」

「待て待て待て!!スウ、落ち着いて!!普通に作ってるだけだから!!」

「普通に作ってこんなにも美味しくなるか!!」

「えええええ?!?!」

「お?何だ何だ!!宴会か!?わたしも混ぜろお!!」

「お!利奈姉さんと星魅姉さん、今日はもうおしまい?」

「ええ。今日の売上は凄かったわ……。半年お店を開かなくても大丈夫なレベルで」

「へえ〜!それは嬉しい悲鳴ね♪」

「ちよつと!?!そっちでのんびりしていないでこっちも気にして!!?」

「いいから秘密を洗いざらい言え!!本当は何か隠しているんだろう!!? さあーさあ!!」

「100枚が駄目なら50枚で……」

「さあ!!遊ぼう!とおやあ〜!!」

「いいから落ち着いてくれ!!」

一通り店じまいをした利奈姉さんと星魅姉さんも加わり、段々と賑やかになっていつている（主に澄とその周辺だけ）と、不意に店の入り口が開いた。

「ただいま。まったく、賑やかにするのはいいが外まで漏れているぞ。気を付けろ」

「ただいま。お、やってるやつてる♪特別ゲスト連れてきたよ」

「お邪魔するね。おおく賑やかだね」

「お、お邪魔します…。夜分遅くにごめんね?」

「お邪魔します!あ、面白そうなことしてるじゃない!あたしも混ぜて!!」

「おかえりなさい、朝日姉さんに夕羅姉さん。そしていらっしやい、三尋木さん、小鍛冶さんと恒子さん」

入ってきたのはまさかの一団。家に帰ってきた朝姉さん、夕姉さんはともかく、現役プロ雀士、利奈姉さんのライバルであり、昨年の日本代表、三尋木プロ。そして同じプロ雀士で夕姉さんの永遠のライバルで日本最強の雀士、小鍛冶健夜プロ。そして、今年ブレイクした元気はつらつ猪突猛進の新人アナウンサー、福与恒子アナという超豪華面子。

ま、といってもあたしや澄は何度もあっているし、同じ卓を囲んだこともある仲だから気軽なもんだけだね」

「いい加減に……って!?小鍛冶プロに三尋木プロに涼月プロ??!」

「50枚が駄目ならよんじゅ……え?あ、ホントだ」

「あ……うーちゃんだあ!!」

「うーちゃん言うな!!まったく:あんたはいつまでたつてもお子様だねえ」

「お子様上等!!というかうーちゃんだつてお子様な身長じゃん!!」

「開き直るな!!それと、残念ながらあたしの方が5センチだけ大きいわ!!」

人、それを「どんぐりの背比べ」という。

さて、相変わらずな利奈姉さんと咏さんは置いとくとして……。

さすがに、初見さんの董と照は世間を賑やかす大物達を前にしてる

から緊張してー！ー！ー！「三尋木プロ、サイン頂戴」ー！ー！ー！照はそんなことなかったわ。結構度胸あるのかしら？ま、董に関しては予想通りカチカチに固まっちゃってたけれども。

「た、助かった……」

「あら？まだ宴は始まったばかりなのにもうお疲れかしら？」

「今日の午後は散々だったんだよ……。主に誰かさんのせいで」

ぐったりと疲れた様子を見せる澄。

おかしいわね？こんなことじゃ疲れることはないのだけれども。

「……もしかして……何かあった？」

「……………捕まったら蹂躪される、デスゲームみたいなのに参加させられてた……」

「あら……」

それって、照が言っていた「雄叫びをあげて走り回ってた女子集団」のことかしら？……………もしそうならさすがにあれはやり過ぎたかしらね……。

「ごめんなさい。流石にやり過ぎたわね」

「……なっちゃったものはしょうがないよ。こっちで何とかするさ」

「でも、大丈夫なの？」

「何がさ？」

「いや……その追ってきた人たちへの配慮よ。まさかいつもみたいに話して解決するって言うんじゃないでしょうね？」

「う……」

「やっぱり……。今回はか・く・じ・つ・に！それだけじゃ終わらないと思うわ」

「……………そうかな？」

「十中八九、そうよ」

「……………マジか」

「マジよ」

「ど、どうしよう……」

「そうねえ……。澄特製スイーツをいくつかあげればいいんじゃないのかしら？」

「何人いると思ってるのさ……」

そんなことを話していると、澄の携帯が鳴り始めた。

「ちよつとごめん」と断りをいれて、携帯のディスプレイを確認した澄はすぐに嬉しそうな顔になった。

澄の表情から察するに、あの子だろうなく。同級生だしね。

「わりい……久、ちよつと電話出てくるよ」

「はくい、いつてらっしやい。こっちはじゃんじゃん進めているわよ？」

「なるべく早くには帰ってくるつもりだよ」

そう言つて席をはずした澄。それと入れ替わるようにしていつの間にか復活していた董がやって来た。

「？澄はどうしたんだ？」

「知り合いからの電話よ。それより、もう大丈夫なの？」

「ああ……事前に澄から聞いていたからな。……実際に会うとそれどころじゃなかったが」

「そう……。じゃ、今度は話してみる？」

「ん？……いや、それは……」

「おくい！すこやくん!!」

「おい!?……というか君もかなり気軽に呼ぶな……」

「?どうしたの、久ちゃん」

「こちら、今日澄がナンパした弘世董さん」

「え……」

「な、ナンパされたわけじゃない!!……こほん、ええと……は、はじめまして、弘世董です」

「だ……だよね!とつとつとつとーや君がなななナンパなんてするわけないもんね!?ととととりあえずよろしくね!ひろへえふあん!」

「……………」

あ、董がなんとも言えないというか哑然とした顔をしてる。

まあ……そうだよね。まさか、あの小鍛冶プロが一般家庭の高校生、しかも去年まで中学生だった男子にホの字の、レの字の、タの

字なのに加えてまさかの超絶ヘタレともなれば…そんな顔にもなるわ。

「……………いや？澄のルックスと性格ならあり得るかな？」

「なあ……………久」

「なにかしら？」

「……………まさか……………小鍛冶プロは……………」

「ご想像の通りよ♪」

「……………合わない方が良かったかもしれない……………」

「こらこら。そんなこと言わないの」

よく「テレビで見たのと現実では全然違う」って言われるけれど……すこやんはその典型的な例だもの。だって……………

「こーこさん情報によれば、家では常にジャージ。料理はできず、実家から送ってもらってるみたいだし掃除や洗濯とかはかなりサボっているっていう超だらしのない人らしい。」

「久ちゃん!？」

「……………小鍛冶プロのイメージが……………」

「ちよ!?引かないで弘世さん!っっていうかこーこちゃん!!なんて情報流してるの!!」

「んんん?」

「ああああっ!!私のパンケーキいいいっ!!」

「あ、こーこさん、私にもください♪」

「……………私も頂こう」

「オツケ♪」

「オツケイク♪……………じやなあああああああい!!」

「おや?すこやん、いらんのか?ならあたしもいただくわー」

「あー……………!!うーちゃんズルいぞ!!あたしももらおう!!」

「久々にあたしも頂こうか。悪いね、健夜」

「おおうすこやん太っ腹♪」

「いただきます、小鍛冶プロ」

「あ、追加の代金は小鍛冶プロからいただきますね♪」

「え!?!ちよつと皆さん!?!というか星魅ちゃん!!今のは冗談だよね!?!?」

「さてさて…どうでしょうか？」

「冗談と言ってほしいな!?」って、ああああああああ!!パンケーキiiiiiiiiiiiiiiii!!!」

そうして、皆にパンケーキを食い荒らされ、真っ白になったすこやんもいたが、楽しい宴と共に夜はふけていった……。

始まったばかりの高校生活。こんな風楽しく過ごせたらいいな。

そう思う、あたしだった。

side 澄夜

「もしもしゅ…ああ……こつちも無事に入学式終わって今、皆でワイワイやってるよ。そつちこそ元気?」

「……………」

1 | ③ | E N D

第2局 入部試験―①

side 澄夜

お玉にすくった汁を一口……。うん、このくらいならいいかな？
そう判断した僕は2人分のお椀に味噌汁を丁寧に注いで並べていく。一通り注ぎ終わったところで……

「ふあ……。ふ……。おはよ…澄……」

「ん。おはよ、久。もうすぐ朝御飯できるから顔洗って待っててね」
「うん……」

ふらふらと寝ぼけ眼でやって来た久と挨拶を交わす。

昨日、電話から戻ったらもう大惨事で……。お酒を飲み始めた大人組の勢いに周りのみんなも飲まれちゃって日付が変わる頃までどんな騒ぎしてしまった。因みに照とスウは大人組が暴走を始める前にはそれぞれの家に避難という名の帰宅をさせたけど。

……。まあ、名だたるプロ雀士達がとんでもない姿になるからね……。あれは流石に見せらんないって……。

そう思い返しながらお椀をテーブルの上に運ぶ。それとほとんど同じタイミングで洗面所から久が戻ってきた。

「お〜！今日は焼き魚か〜！ちなみに今日の弁当は？」

「もう作ってあるよ。ただ朝日姉ちゃんと夕羅姉ちゃんの分も届けなくちゃならなかったけど」

「あれ!?そういわれてみるとあたし達しかいないじゃない!!」

姉ちゃん達が居なくなっているのに対してやれ寝坊したって騒ぐ久だったけど、今日は珍しく皆の用事が固まっていただけなんだよね。

朝日姉ちゃんと夕羅姉ちゃんは朝の職員会議らしいし、夕羅姉ちゃんは今更に昨日もクラスメイトがこそこそと話していたテレビや雑誌で言ってた彼氏報道の真相を伝えてくるとか言ってたな。……：そーういやあの報道、ガセなんだっけ。

そして、星利奈姉ちゃんも仕事の準備とかやらで早めに出ていったし、星魅姉ちゃんにいたってはなにやら遠出するみたいで県外まで

行ってくるとか言ってたし。……まあ、十中八九あの人のところだろうけども。

そんなことを久に伝えながら朝御飯を食べ始める。……うん、ちよつとだけ塩加減強かったかな？

「あ、そういえば……」

朝食を済ませ、僕が皿洗いをしていると久が思い出したように問いかけてきた。

「昨日の電話。あれ怜からだっただんでしょ？」

「そうだったけど……何でわかったの？」

「あんたとあの子、なっかなかに深くい仲だからってこともあるだろうけど……あんた、電話が来たときにすつつつごく緩んだ顔してたからね。すぐにわかったわよ」

「うえ……。ホント？」

「ホントよホント。お姉ちゃんは何でもわかるのよ♪」

「ハイハイ……」

昨日もそうだったけれども、昔つからなにかと久は姉ちゃんぶるんだよね……。誕生日がちよつとだけ僕よか早いだけなのにね。

……嫌な感じはしないからあんまり気にはしていないんだけどね。

「それでそれで？一体何を話したのよ♪」

「久が期待しているような話じゃなくて、普通に入学祝いの電話だったよ。……ああ、それと怜のあっちの友達も紹介してもらったんだ」――――

▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽

『そつちこそ元氣？怜』

《ふつふくん♪ここ最近の怜ちゃんはすこぶるちよーしいんやで♪》

『あー……そう言って倒れたことって何回あったっけ？』

《大丈夫大丈夫。今日の今日はほんまのホンマや♪》

『本当……？』

《ホントやホント。怜ちゃんはいつでもホントやで♪》

『そつちも入学式だったんだよね?』

《そやで、友達とおんなじ学校に入れたんやからとつても楽や♪》
『そつか。そういえば、その友達とまだ会ったことなかったよね』

《そおいや、そうやったね。ま、うちが色々話してもうたから友達の方は澄のこと、知ってるで〜》

『わ、変なこと言ってないよね?』

《んん?なんや?澄はかわいいかわいい幼馴染みの怜ちゃん差し置いて、怜ちゃんの友達を狙つとるんか?薄情やな〜》

『何でそうなるし……。ただ、仲良くなりただけだよ』

《ほほお〜?そう言って手駒にした女の子は何人いるん?》

『誰も手駒になんてしてないってば……』

《またまた〜そういってあれ?怜、誰と電話してるん?》わ、も〜……
いいとこやったのに〜》

『件の友達さんかな?』

《そや。りゅーか!今、いいとこやねん。ちよつとあつち行つててー
な》

《ん?ん?それって……もしかして噂の涼月くん?》

《ちよ……何でこんなときだけ、感がいいねん!!》

《おつ!?!なんやなんや?噂の幼馴染みか?》

何やら徐々にあつちが賑やかになつていく。といつてもこつちも壁を隔てた向こう側がめちやくちや賑やかだったけども。

《わわわ私もももも話してていいん?いいいん?いいいん??》

《ちよつ!?!落ち着け落ち着け!!そんな顔真つ赤にしてテンパンなや
!!》

《も〜〜!りゅーかは写真見せてから嵌まりすぎや!!澄はぜええ〜つ
たい渡さへん!!渡さへんでええつ!!》

『あ〜……別に僕は怜のものじゃないんだけど……』

《澄はちよい静かにしい!!》

そうして、向こうは何やら《話したい!》《話させない!》で活気づき始める。何と云うか僕の意見は完全に無視されているのが気にか

かるけど……………。

とりあえず、テレビ通話にした方が良さそうだと判断しちやちやつと切り替える。

《あっ!?こら澄!!勝手にテレビ通話にすな!!》

《わ、わ、わ……。しゃ、写真で見るとよりずっと……カッコいいやないか……………》

『あはは。ありがとね、お世辞でも嬉しいよ』

《お世辞やないと思うんやけど……………?》

《ま、それはしゃーないわ。何せ澄は超弩級のニブチンだかんなく》

『ん?どうしたのさ怜?』

《何でもありません》

それじゃなんで膨れっ面してるんや……。

『ええと、それじゃ改めて……怜の幼なじみの涼月澄夜です。何度か怜から聞いてるけどいつも怜がお世話になってます』

《ちよい待ち澄い!!何でいつも私が世話かけとる前提なんや!?!》

《事実そうやろが……。俺は江口セーラちゆうねん。気軽にセーラでええで》

《わわわわ私ははははは清水谷竜華って言います。わわわわたしのことでももりゆりゆ竜華って》

『セーラと竜華……だね。これからもよろしくね』

《ふきゆうっ!?!……ちよ、ちよつと席外すわ……》

《あくあく……やっぱこうなったなあ……………》

《あいつ、どないしたん?》

『?竜華どうしたのさ?おーい??』

《……原因は澄、あんたやで?》

『??どういうこと??』

黒髪を下ろしたおしとやかそうな雰囲気の竜華は何故か顔を真っ赤にしてどこかに姿を隠してしまう。

んん〜??変なことをいったりやったりしてないのに何で??

《ああ……なるほど。さっきのはこうゆうこっか》

《せやで。澄はな、いいやつなんやけどこうゆうことが玉に傷なんや

……》

しかも、その間にセーラは何か何か納得した顔になっている……

《そおいや……澄夜はどこに入学したんやっけ?》

『僕?僕は白糸台だけど……』

《へえ……白糸台かあ。………白糸台いい!?!?》

《お♪そんならやつぱり……?》

『うん、麻雀部に入るつもり。もしかしたらそっちの学校と当たるかもね』

《ふふふ……例え澄や久が入ったとしてもうちらはそうそう簡単に負けへんで?》

《待て待て!?白糸台っちゅうと……澄夜ってめちやくちや頭いいん!?!?》

《ん?そやで?ちゅーか頭も良ければ運動もよし。おまけに麻雀強いし家事万能、極めつけに性格めちやめちや優しいっちゅー最良物件や!!そおくん澄が怜ちやんの彼氏なんやで?》

『なに言ってるんのさ……。僕と怜は付き合ってるんでしょ?』

《ちよーい!そこは乗ってくれへんと!!》

《ほはく。世の中にやこんな人もおるねんなく》

『怜が言ってるのは結構過大評価だよ……。やらなきやいけないからやってるだけ』

《それでも澄のクオリティはそんなじゃそこの男どもとは各が違うねん。それが女の子にとっちゃくいいんやで??》

『んく……。そういうもん?』

《そういうもんや》《まあ……せやな》

▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲

「……」って感じな話でそれでその後には童華も戻ってきて、それなりに雑談して終わったよ」

昨日の怜達との電話とのことを話ながら玄関の鍵を閉める。

ちなみに最初に出た電話の相手……園城寺怜は僕の幼馴染みの一人だ。といっても僕や久と同じ長野出身……ではなくて、彼女は大阪の出身。父さん達と全国を回り始めたとき、一番最初に出会ったんだ

けどその後、まあ……いろいろあつて仲良くなった。そして、時々ではあるけれども一緒に全国を回ったこともある。昔つから気さくな感じで飄々とはしているけれど、人の本質を見抜くことを得意としている。それに……彼女には特殊な『瞳』がある。

それはまあ、後々。

「へえ。何かその清水谷さんだっけ？いじりがいがありそうだわあ
〜♪」

「あ〜……やめたげてね？あの子、物凄く純情そうだったし」

悪く顔しながら何かを企み始めた久と肩を並べながら学校までの道を歩き始める。

「……………昨日の人達の襲撃……………というか追跡も考えていたんだけど……………とにかくそれは来たら考えよう

結局、警戒していた女子集団は現れず……………いや、ホント怖いよ？何せ昨日鬼の形相で追っかけてきた集団が一晩たったら音沙汰なくなるんだよ??学校で何かが待ち構えてるとしか思えないよ???

……………ふふふ……………怖い。

そんな気を紛らわすために久と色々話していんだけど、話題は昨日の朝日姉ちゃんの用事の話になった。

「ところで……………昨日の朝日姉ちゃんの用事って結局なんだったのさ？」

「ああ、それ？何か麻雀部の先輩たちと一局手合わせしたわ」

「へ〜。帰ってきた時の感じからして勝ったんでしょ？」

「ええ、それでここ最近の朝姉さんの悩みがわかった気がするわ……………正直肩透かしだったもん」

「……………それは先輩本人の前では言っちゃだめだよ……………」

「あらら。こりやく手厳しい意見だなあ〜」

「……………うえ〜」

「あら〜♪おはよう〜鈴ちゃん♪」

「はろはろ〜久っち〜♪」

そろ〜つと声が出た方向に顔を向けると……………学校指定のブレザー

……っていうんだっけか？とにかくうちの学校の制服を少しだけ改造したであろう服装の緑髪の女の子が声をかけてきた。

「そして……君が………涼月澄夜君だね？」

「そうですけど………」

「ふくん……？」

な、何だろ？何かじろじろ値踏みするように見られてるんだけども???そういうや何で僕の名前を???

「いやはや、突然ごめんね。朝日センセの弟さんがどんなのなのか気になっちゃって」

「朝日姉ちゃん？てことは………」

「そ。ご察しの通りあたしは白糸台麻雀部所属………そして白糸台高校2年の鈴川茄奈♪これからよろしく♪」

やっぱり。

それにしても何だか少し昔の……ええと、ギャル………だっけ？そんな風な人が来たなあ……。でも………そんな感じはしないけれども………?

と、そんなことを思っていたら。

「ちなみに今は猫被ってるけど実際はめちゃくちゃ純情だからね♪」

「ちよ!?久つちそれは言わないお約束!!」

「ほへくやっぱり」

「ええ!?すーくん、分かったの!？」

「まあ………直感的に」

「ええ………」

ガツクリと肩を落としてしまう鈴谷先輩。でもすぐに顔を上げ

……

「ま、いいか！とにかく学校に行きましょ？」

「ですね。あんまりゆつくりしていると遅刻しちゃいますし」

「だね♪」

そうして、僕らは先輩を交えて学校を目指すことになった。

side 久

「つと……それじゃ、あたしはここまで。それじゃまたね〜」
校舎に入ったところで別の階の鈴ちゃんと別れる。

昨日あったばっかだけどすぐに仲良くなっただよね〜。なんと
いうか波長が合うというか。

「では、また」

「じゃね〜」

礼儀正しくお辞儀をする澄に対して私は右手を軽く振るう。

「だめだよ？先輩なんだからもつと丁寧にしないと……」

「鈴ちゃんがいいっていったのよ。澄こそ、ちよつと固すぎじゃない
？」

「うう〜ん。そうかなあ……」

そんなことを話ながら私たちの教室へ足を向けようとする……

「はっ!!涼月様よ!!」

「親衛隊!!一同せいれえええつつ!!」

「うえ!?!」「あらま」

1人女子生徒が澄に気づいたその瞬間、謎の号令がかかり至るところからぞろぞろと女子生徒が現れ……というかゴミ箱からつてよく
いれたわね。というかそもそも何で入ってたのかしら？

しかも、その集まる数が多いのなんのって……

「「「「「涼月様!!」「」」」」」

「「「「「おはようございます!!」「」」」」」

「う、うん……おはよ……」

「「「「「ああ……!!」「」」」」」

「「「「「これで今日も1日生きられるわ……!!」「」」」」」

ええと?いつから澄は神様になったのかしら??

「えと?」

「突然の事で驚かせてしまい申し訳ありません」

「私たちはあなた様を影から見守り、あなた様のすべてを守るそれこそが……」

「「「「我々!!」「」」」」

「「「「「涼月様親衛隊でございます!!」「」」」」」

わあー。まっさか昨日の今日で漫画みたいなこんな親衛隊が作られるなんて凄いわあ〜……。

……………フム。

「ええつと……………」

「それならば、私も参加していいかしら？」

「ちよお!？」

「二二お、おお……………!!」

「二二ひ、久様が……………!!!」

「悪い条件じゃないと思うわよ？ 何せ私なら澄とよく一緒に行動できるからいつでもかん……………じゃなかった、見守ることができるし」

「待って!? 今監視とかいいかけなかった?!？」

「そんなこと言うわけないじゃない。それでしかもこの子にとっての良し悪し判断ができるようになるわ。それはもう何から十二までね?」

「ちよつと!? ちよつと?!?! 今度は何か含みをm「二二滅相もない!!!」

……………ええ……………」

「二二久様がお仲間になられるのなら百人力です!!!」

「よし、決まりね。なら今日から私が涼月……………いえ、澄護衛親衛隊長

……………でもいいかしら?」

「二二もちろん!!!」

「ええええ……………」

澄が何だか呆然としているけど……………それは関係ないわね。いやはやこおくんが楽しそうなこと見逃すわけにはいかないわ♪

「へえ……………そんなことがあったの」

「そうなのよ。あ、照と董のことは特別隊員つてことにしといたわ。

澄の近くにいてもこれで他の人から何か言われることはないわ」

「……………ん。これで気兼ねなく甘いものを食べに行ける」

「結局甘いもの目当てなのね……………」

朝のHRも終わり、遅刻寸前でやって来た照と今朝の出来事を話す。

澄？澄なら……

「しつきしがさんじゅーにまーい……しつきしがさんじゅーさんまーい……」

死んだ魚の目をしながら適当にひたすら色紙にサインをしていた。実はあのあと親衛隊に所属している全隊員に親衛隊所属の証……まあ、サインをお願いされて……澄も「それくらいなら」って言ったんだけど……

「まさか300枚近く頼まれるなんてね」

「大変そう……」

「しつきしがよんじゅーまーい……しつきしがよんじゅーいちまーい……」

「ま、モテる男の宿命みたいなものね」

「確かに。しかもお姉さんがあんなに綺麗な人達何だし……いや、ししょくは可愛いかな？」

「騒々しいの間違いじゃない？」

「へっぷしっ!!」

「おんや〜？風邪かい？だらしないねえ」

「ふふん！残念だったな、うーちゃん!!わたしは風邪を引いたことなんてないのさ!!」

「あつそく……てか、うーちゃんはやめろって言ってんでしようが!!」

「しつきしがよんじゅーはちまーい……でもみすったからぽ〜い〜……」

「……手伝わないの？」

「可哀想だけどさすがにねえ……？見てる分なら楽しいのだけれども
♪

そんなことを話しているうちに1時限目の開始を始めるチャイムがなり……

「おうーこらあ!!席に着きやがれ!!今から国語を始めんぞ!!」

何だかどこぞのCMに出てきた先生のような先生がやって来て

各々が自分の席に戻り、私や照も黒板に向き直った。

「そうして、時は過ぎ…お昼。」

4時限目の授業が終わるチャイムがなり、クラスメイト達の緊張が少し緩む。

因みに1時限目の授業…：神のいたずらか悪魔の罠なのかは知らないけど米田くんって人が丁度いて…：あのCMみたいなことをしてくれた。何だかあの先生の持ち芸みたいだったけど今回はまさにあのCMの再現だった。黒板の文字は『雄芽出当』だったけど。
……………そしておもいつきり滑ってたけど。

「…はい。では号令の人お願いします」

「起立！礼！！」

「！！「ありがとうございますー！！！！」」

「そうして授業も終わり昼休みへ…」

「さて、それじゃご飯に…」

「……………」

振り替えると既に真っ白に燃え尽きてしまった澄だった何かがある。ここにいた。

「なんか…：オーバーヒートしちゃった」

「ま、昨日の今日だからね」

「？中学では??」

「基本的、澄は転勤族だったのよ。だからある意味こういうことには慣れてないのよね」

「へえー」って言いながら澄をつつく照。それに対しても澄だったなにかは何にも反応をしめすことはない。ただの屍のようだ。

「ま、それは今に復活するだろうから放っておきましょう。私達は董も誘って…：そうね、中庭辺りでご飯にしましょうか」

「ん。賛成」

「……………はっ！弁当！！」

屍がお昼という言葉に反応してようやく澄として復活して、鞆をひっ掴み…

「すまん。先に飯にしてて！」

と一言残して大急ぎで教室をでていった。

……案外、大丈夫そうね。

その後、隣のクラスの董を捕まえて4月の陽気な日差しが降り注ぐ中庭にやって来ると意外に賑わっていた。3人でどこに座ろうか悩んでいると……

「おお〜い！久っちゅ!!」

朝に引き続き鈴ちゃんから声をかけられ、そこに足を向けると

「こんにちは。久さん」

「涼月か。昨日ぶりだな」

「あら、部長さんに羽智さん。こんにちはは〜」

白糸台高校3年の生徒会長にして巨大な白糸台麻雀部の部長を務める胡原湊さんと鈴ちゃんと同じ2年生の来年の生徒会長& a m p ; 麻雀部部长候補筆頭である穂山羽智（はち）さんも一緒にいた。

「それで……後ろの2人は？」

「紹介しますね。こちら友達の宮永照と弘瀬董です」

「宮永照……よろしく」

「弘世董です」

「まあ……」

「??」

あれ？何か2人を紹介したら何だか湊さんが変な反応を……

「あ、ごめんなさい。こちらの自己紹介がまだでしたね……ご存じかもしれませんが、私は胡原湊と申します」

「穂山羽智だ。よろしく頼む」

「あたしは鈴川茄奈♪よろしくね♪っていうか照っちだっけ？すっつごく可愛い〜!!!!」

「むぎゅ……」

「同伴のお誘い、そしてお心遣いありがとうございます。胡原会長、穂山先輩」

「いや、誘ったのは茄奈だ。礼は彼女にいつてくれ」

「ふふ。新入生を導くのも先輩の役目だもの……気にしなくていいわ」

そうして各々が座ったその時。

「お姉様〜!!」

「……………ども」

「いたいた……ここにいたのか」

「お、おお……美人たちの花園っ……」

何やら賑やかな人と、ノートパソコンを抱えた金髪の人。そしてちよつと肩で息をしながら来た澄と少しワカメ髪の人が同時にやって来た。

「あら、美波と麻那ちゃん。どうしたの？」

「いえ！私はお姉様とお食事を……」

「私は巻き添えで……………」

「澄、お疲れ〜」

「ちよつと意気投合した、というか同郷の人連れてきたけど……」

「ん？何だ染谷じゃないか」

「おろ？弘世？なんでここに」

「あれ？2人は知り合い？」

「というかクラスメイトだな。まさか澄と意気投合するとは」

「いやなに。没収された携帯取りに職員室に言ったらさく、かの有名な人夕羅先生と『白糸台の番長』朝日さんに弁当渡してた澄夜と出くわしてやい」

「そういえば染谷って言う……染谷おじいちゃんの？」

「そそ。何となく雰囲気似てたからもしかして……と思っただけ聞いてみたらビンゴだね」

「俺は武者修行として来てただけで、まさか親父とじっちゃん知り合いに出会うとは思ってなくてなあ〜」

「何だか一気に賑やかになったね〜」

「そうだな……少し広いところに移動した方が良さそうか？」

「大丈夫だと思う……」

「てゆうか!! やっぱ照つちめちやくちや可愛い〜!!! お人形さんみた

いゝ!!!

「あうあう」

何だかんだでまたまた賑やかになり……少し落ち着いたあと皆で改めて自己紹介を済ませる。

まず湊さんのことを「お姉様〜」なんて、リアルでそんな人いるんだ!?と思わせた御仁は胡原泉さん。胡原会長の妹さんで現在茶道部に所属しているらしい。

そして、泉さんに着いてきたノートパソコン無口そうな、けどもどこか照とそっくりな感じをさせている人は三納代ミレアさん。何かどっかの国のクォーターらしいけど詳しくは教えてもらえなかった。残念。

そして、私と澄のお（義）父さんの親友のご子息。ちよびつとワカメ髪の染谷勝啓（かつひろ）くん。私達と同じ新入生でさつき言っていたようにここ白糸台には麻雀の武者修行としてやって来たみたい。何だか地元に来てきた妹さんの事をすんごく気にしてた。……あれ？私、勝啓くんのこととは知らないけど妹さんのことは知ってる……。試しに澄にも聞いてみると

「ん〜……僕もそういやひろくんのこと知らなかったや」

ひろくんって……一気に仲良くなったんだ。

まあ、それは置いてくとして……勝啓くんは何でか詳しく聞いてみると……

「ああ……確かに俺は長野生まれだけど基本的にお袋の地元にはいたかな。あ、因みに離婚とかしてる訳じゃなくってさ……なんつーか、お袋の地元の方が色々あつからつちゆう若人らしいつちやらしい理由だぜ？」

とのこと。……何だか勝啓くんの雰囲気的にそんな気はしていたけれども、まさかホントにそんな理由だとわ……。にしても、長野って言っても都会に負けない色々な魅力があると思うけどね〜信州そばだとか諏訪湖だとか色々。

まあ、そんなこんながあつてようやくお昼となった。……といてもそんな時間に時間がたつてるわけじゃないんだけどね。

「はい。久の分」

「ありがと〜♪」

「おいおい。こちらら購買で苦勞して買ったパンだと言うのに……」

「なら今度僕が作るときはひろくんの分も作ってこようか？」

「お？おかずぐらいでいいから頼めるか？」

「うん。それぐらいなら変わらないけど……ご飯はいいの？」

「米なら炊けるからな！」

「フツ……結局男なんてその程度ね。きつと涼月弟だつて……」

「フン♪残念だったわね♪澄のは1から手作りよ♪」

「なん……だ……と……！」

「ほほう？澄夜は料理ができるのか？」

「澄はですな家事なら基本全部できますよ〜♪」

「確かに昨日の調理場での動きは手馴れていたな」

「……アンれ〜??何で董っちは澄っちのお店での……しかも裏方のことを知ってるのかにや〜??」

「昨日、ちよつと客の出入りが凄かったんで手伝ってもらったんですよ」

「そうなんだ〜……。ちえつ、つまらないの」

「まあまあ。それで……董さんはどうするの？もし彼の店でまた仕事をやるのなら、一応バイト申請が必要になるけれど……」

「そういうえば星姉さんもまた来てほしいっていつてたわよね？」

「そうそう、スウにその事を伝えなきゃいけなかったんだ。……朝からの色紙地獄ですつかりわすれてたよ」

「色紙地獄？」

「それは触れないで……。それでなんだけど、どうかな？」

「………考えておくわ」

「登録なら早めにお願いな」

「………（はむはむ）」

「………（あむあむ）」

色んな話題で賑やかになりながら各々が持ち込んだお弁当を皆で食べる。まあ、弱冠2名ほど我が道を行っていたけれど……。

……うんパンにかじりつく姿が小動物みたいで可愛いからいいか。

「……………?」

視線に気づいた2人がふっ…と顔を上げ首をかしげる。

……この瞬間、十中八九ここにいる全員がこう思った……………。

(((((やべえ。くっそかわええ…………)))

と…………。

そして、私達はその後も昼休みが終わるまで賑やかに昼御飯を食べながら色々とお話ししていたのだった。

2 | ① END

第2局 入部試験②

side 澄夜

昼御飯を先輩たちと賑やかに済ましたあと、お腹が満たされたことによつて襲いかかつてきた睡魔と戦いながらも5、6時間目の授業と帰りのSHRを乗り越え(照は完全に轟沈していたけれども。久?久は案外こういうときでも寝ないんだよね)。寝るときやうまく隠れて寝るし)ようやく放課後となつただけだ……。……。

「んく……」

仲良くなつたクラスメイトと別れ、帰路につきながら僕と久はとある問題に頭を悩ましていた。それは……

「……今日、お店どうしよう?」

「…そう……ねえ……。姉さんたちは何か言つてた?」

「特に何にも言われてないなあ……」

何せ今日は姉ちゃん達がみんな出払っていることもあつてお店の人手が圧倒的に足らなくなつちやつているのだ。……普段なら2人でもなんともないんだけど、昨日の今日だからまだまだお客さんがたくさんくると仮定すると流石につらいものがある。

「……ちなみに何か手伝つてもらえるあてはあるの?」

「……あるっちゃあるけど……」

うくん……2日連続はねえ……。

……あ、でも……。

「……もう1人いるし、いけるかな?」

「……それでも4人かあ……。先輩達、手空いてるかな?」

「どうだろ?明日から部活説明会だよね?」

「……頼み込んでみる?」

「流石に……ちよつと抵抗あるかなあ……」

「だよねえ……」

ホント、これは困つたな……。家に姉ちゃん達の誰かが帰ってきてくれてたらいいんだけど……。

「……うーん……。ダメ元で聞いてみようかしら?」

「だね……。僕も連絡して聞いてみるよ」

昨日は巻き込んだんじゃないかといえ流石に2日連続でも来てくれるか結構不安だけど……。とにかく僕は連絡をとってみることにした……。

で。みんなに連絡をとった結果なんだけども……。

「……澄は私と染谷だけに連絡したというのはわかった……。それで……。久は一体誰に連絡したんだ？」

「私は鈴ちゃんに連絡してわ♪」

「それで、私は久つちから連絡受けて部長に許可とって♪」

「……では、鈴川先輩。その時周りには？」

「それなりに人がいたよ♪」

「そつかくそれなら仕方ないね♪」

「だよねえ♪」

「だよねえ♪じゃない!!ぜつつたいにそれが原因なんだろうが!!」

現在、開店前。店のなかには僕と久。そして連絡を受けて駆け付けてくれたスウ、鈴川先輩。会話には加わってはいないけれど奥には三納代先輩とひろくん。

そして、店の前には……。

「……芸能人もいるかのような人ばかりが出来上がっていた。」

「……ええつと……。何がどうやったら手伝いの人たちよりもお客さんが増えてるんだろう？確かにお客さんが多くなるだろうか。らって手伝いを頼んだのに何でお客さんも増えてるの?？」

「これでは本末転倒じゃないか!!」

まさしくスウの言う通りではあるんだけども……。

「ん〜厨房なら大丈夫よ？私と澄がいれば普通に回るし♪」

「うん。そこは僕も心配してないんだけど……」

「大丈夫♪大丈夫♪私もウエイトレスのバイトはやったことあるし、会計はミレイに任せれば安心だからね〜」

「うーん……なら大丈夫かなあ？」

「えええ……」

まあ、スウは昨日の怒濤のお客さんラツシュを体験しているからそれを心配しているんだらうけれど……。来てくれた鈴川先輩や三代納先輩もそれなりに自信もあるみたいだし大丈夫だよね……。

「よーし！それじゃ張り切っていこー！ー！！」

「おー！！」

……だよね??

……………それで、まあ開店したんだけど……

「次！12番!!タピオカドリンクとパンケーキ!!」

「はい！それでこれ3番さんとこのパスタとパフェ!!」

「よっしゃ！料理は任せろー！ー！！」

「いらっしやいませ〜！申し訳ありませんが現在込み合っております……」

「涼月くん……スイーツ……」

「できてますよ〜！持ってってください!!」

「え？かわいい？お兄さんありがと〜♪ちよつとだけサービスしてあげるね♪」

「ちよつ!?!いいのか!？」

「いいよ〜♪」

「ほい！澄夜！」

「よつと！スウ!!よろしく!!」

「あ、ああ!!」

「タコス!!タコスを所望するのじえ!!」

「タコスなんてあつたかしら?」

「うし！作つた!!」

「こはやっ!!」

「感心するよりもさっさと動いてください!!」

「……………昨日と同等もしくはそれ以上に忙しくなつて……………」

結局落ち着いたのはまさに閉店時間近くだった。

「お疲れ……………」

「いや〜がつぱりがつぱり♪」

「ここ2日の売上すごいわ〜♪」

「……………よかったな……………」

「ご馳走さま!!このタコスはずいじえ!!こんなタコス初めてだじえ!!」

「あはは……………ありがとね。でもそろそろお店閉めるから君もお家に帰つてね」

今、お店に残っているのはご近所の常連さんが何人かと何故かタコスばかり頼んだ腰に猫の……………なんだろうバックかな?を下げた女の子だけ。ちなみにひろくんは疲れきっていたからもう家に返した。それ以外のスウと三納代先輩はカウンター席で轟沈していて鈴川先輩と久は今日の売り上げで盛り上がっている。それで僕はというと残っているタコスの子と色々お話ししていた。

この子、何だか星利奈姉ちゃんどこか似ている……………というか性格とか仕草がそっくりなんだよね〜。

「にしてもホント東京つてすごいじえ!!こーんなタコスが美味しいお店があるんだから!!」

「あれ?君東京の人じゃないんだ」

「およ?もしかしてお兄さんもなのか??私は長野から友達のおしよーを探しに来たんだじよ!!」

「えー!長野!?!」

「??」

「ああ、ごめんね?いや〜こんな偶然があるなんて思わなくてさ。実は僕も長野出身なんだ」

ホントこんな偶然あるんだなあ〜。

僕がそんなことを思つてちよつとほっこりしていると……………。

「おお！すごいのだじえ!!あ……それなら

—————涼月澄夜って人知ってるか??」

「……………ん?」

「……………じよ??」

突然僕の名前を出されて少し首をかしげて固まってしまふ。それに合わせて女の子はちよつと首をかしげているけど……というかえ?って言う……まさか長野から来たってのは……。

「もしかして……そのお友だちって原村和ちゃん……とか?」

「そうなのじえ!というかお兄さん何で知ってるのじえ??」

「ののちゃん……こつちまで来ちゃったのか!」

「え?学校はどうしたの?」

「?学校ならまだお休みだじえ!」

「……………え、2人だけ??」

「いや?先輩が1人一緒にいるのじえ!」

「……………で、君は何でここに??」

「迷子になっちゃったのじえ!!そして私は君じゃなくて片岡優希なのじえ!!」

うん。えっへんと威張っているけど威張れることじゃないからね?
にしてもののちゃん、こつちに遊びに来ているのか。確かに何日か

前の電話で「暇があれば遊びにおいでよ」っていったけど……そのときは「先生の腕に近づいたら行きますのでご遠慮します」とか言つたのに。

「ええと、さっきの君のお友だちの……コホン、原村ちゃんの事を何で知っているのかって言うよね、僕が原村ちゃんが探しているお師匠さんだからだよ」

「え!?!お兄さんが!」

うわく見てて飽きないなこの子。一度一度の反応がオーバーリアクションだけど何だか可愛げがあるし、リアクションの仕方もちよつ

と面白いし……。もし星利奈姉ちゃんがいたらもっと面白くなつてたろうけどね。

「さつきから賑やかだが……。どうかしたのか？」

「ああ、スウお疲れ様」

僕とこの子の話が気になったのか少しだけ復活したスウがこちらへとやって来た。ちらつと久達の方を見るとあつちはあつちで常連の人達との会話を楽しんでいるみたいだった。

「スウ、ちよつとごめん。少しの間この子の相手をしてて」

「別にいいが……」

「理由はすぐ後で話すよ」

そうして僕はスウにタコスの子の事を一旦任せて裏に戻つてののちゃんの電話番号をコールする。

何度かコールしたあとののちゃんが出てくれたんだけど……

『あつ！せ、先生!』

「こんばんは……。かな？少し前ぶり、ののちゃん」

『は、はいっ！あ、あ、あのとうか……。』

「あははっ、落ち着いて？今東京にいるでしょ？」

『え!？そ、そうですけど……。』

「えーと、だったら……。元氣一杯でタコス大好き、それでいて少し金に近い栗色つぼい色の髪を二つに結んだ、腰に猫の鞆か何かを持った後輩か友達っていない？」

『っ！ゆーきのことですか!』

「多分、その子だね。彼女なら今僕の家のお店に来ているよ」

『本当ですかっ!』

「うん。だから今の大体の場所を教えてほしいな」

ののちゃんが話した位置はここからそう離れてなくて、すぐに道のりを伝えて一旦電話をきる。そうしてタコスの子……。優希ちゃんのところに戻った。

「ただいま。ありがとね、スウ」

「気にするな、これぐらいお安いご用だ」

「頼もしいね。それで……。片岡ちゃんだっけ？ののちゃん達すぐ来

るっていつてるからもうちよつと待つてね」

「わかったじえ！それならまたタコス!!後私のことは優希でいいのじえ!!」

「はいはい」

本当にこの子はタコスが好きなんだな。まあ、この料理ものすごくバリエーションを作りやすいし……今度からメニューにいれてもいいかもしれないね。

そんなことを考えながら、またスウに優希ちゃんの相手をお願いした後僕はタコスの製作に取りかかった。

「ゆーきっ!」

「片岡さん!」

「ふあ!のふおふあんほふおふおふあんへえん!!」

「こーら、何か食べているときに喋るんじゃないやありません」

「女子なら男子が見てる前ではなあ……」

よつぽど探していたんだろう必死の形相で飛び込んできたのちやんと、もう1人の……きつと先輩さんとやら。それに構わず口一杯にタコスを頬張る優希ちゃん。

にしても出会えて良かった良かった。東京は面積こそちつさいけれど、人の密集率がすごいからね………迷子になったら中々目当ての人が見つからなくなるんだよなあ……(経験者は語るのよさ。……え?誰で経験したかって??………家のちつちやな姉ちゃんといったら察してほしいな)

「先生……ご迷惑をおかけしました」

「いいっていいって、無事に出会えて良かったよ。にしてもものちやんが東京に来るなんてね」

「すいません。先輩とゆーきがどうしてもというので……」

「それではるばる長野から来てくれたんだ。嬉しいな」

「あう……」

「あれ……?和じゃない!」

ほのぼのとののちやんと話していると隣から久もやって来た

……っていうか、常連さんと先輩たちは帰ったみたいで姿が見えなくなっていた。

「お疲れ様。先輩たちはもう?」

「ええ。常連さんが帰ったぐらいであがってもらったわ。それにしても和がいるなんて……澄が呼んだのかしら?」

「いえ、私の友人と先輩が先生にどうしても会いたっていうので……父に相談したところ、先生のもとならば行ってもいいと許可を貰えたものですから」

「あらあら。既にお義父さんの信頼を得ちゃってるじゃない♪」

「その信頼がちよつと重めだよ……」

うーん……原村のおじさんととても厳しいんだよね。それでいて自由奔放な父さんと親友だなんて……正直かなり驚いたんだよね。

そのあと、ここ最近の近況を3人で話し合っていると……。

「楽しそうなところ失礼します。原村さん、このかたが……?」

さっきののちゃんと一緒に飛び込んできたくると丸まったお下げが特徴的な子がこちらへとやって来た。その後ろからはタコスを食べ終わって満足げな優希ちゃんと少し疲れたようすのスウもいる。

「あ、はい。先生、久さん紹介しますね。このかたは私の中学の先輩、花田煌先輩です」

「花田煌です。この度は片岡さんがお世話になりました」

スツゴい丁寧な子だなく。元気一杯な優希ちゃんとは真逆だ。

「ええと、不肖ののちゃんの先生をやってます、涼月澄夜です。よろしくね花田さん」

「その姉の久よ。こちらこそよろしくね」

「それと私だが、弘世董という。2人の同級生だ」

「さて……それじゃ積もる話もあるけどさ、時間も時間だから先に晩御飯にしようよ。ののちゃんたちはもちろんそうだけど、スウもね」

「すばら!!お気遣い感謝です!!」

「ふむ。今日はお言葉に甘えさせてもらおうか」

「あたしはタコス!タコスを所望するのじえ!!」

「また(か)!?」

「うーん……申し訳ないような……」

「和はどこか行きたい飲食店があるのかしら？」

「……いいえ」

「なら、決定ね♪」

そうして、今日は姉ちゃん達が帰ってくる前にみんなで夕飯を食べるようになった。

side 董

「……なるほどな。だから先生なのか」

「そ。あの子らしいと言えばあの子らしい事よ」

澄達の言葉に甘え……というかよく考えたら2日連続お世話になっっている。そんなこともあり今日は久が料理の手伝いをかってでた。他の人たちはリビングで色々なことを話している。

「ねえ、董」

「なんだ？」

「澄がさつきいってただけどね〜昨日今日、結局麻雀できなくてごめんねだつて」

「……特に私は気にはしていないが？」

「澄はそう言うところを気にするのよ。更に言えば本当は自分の口から言いたかったみたいだけどね…あの子心のそこから優しいからね〜全国回っていたときにかなりの数の友達を作ったみたいでなにかとこういうときには引っ張りだこになるのよ〜」

「……………何かわかるような気がしないこともないな」

「でしよう？……………あたしもその口だしね」

普段に比べて幾分か暗い口調でなにかを呟いた久。

……………どうやらこの家族は早々一筋縄ではないみたいだな。しかし、まだ私は干渉できるほど交流を深めたわけじゃない。ならば

「気にはなるがそれは追々聞くとしよう。だが……私が君たちの信頼にたる者になったときは話してくれるか？」

「ふふつ。それ……澄の受け売りでしょ？」

「ふつ……流石姉弟だ」

て皆さんにお話ししようと思いましたが」

「そ、それはまた今度にしましょう、原村さん」

「和は相変わらずね」

「はい！いつかはこの世界中に先生の素晴らしい心意気を広め、先生の先生による全人類のための救済を……」

「お、おい!?何かあの子のなかで澄が神格化されているぞ!」

「あー……ええと、ちよおつと色々あったのよ」

「いやいやいや……あれは絶対ちよつとじゃないだろう!?確かに誰かに憧れを抱くことはあるがどこかの宗教の教祖のように崇めるようになるなんてそうそうないぞ!」

「ごめん、待たせちゃっ……あれ?皆どうしたの?」

電話を終えて戻ってきた澄に片岡、花田と共にこいつは一体何をやったのかという視線を向ける。本人はそんなことに気づきもせず首をかしげていたけれど。

「何でもない何でもない。さ、それより覚める前に食事にしちゃいましょ?」

「そうですね。そうしましょう!ささ……先生は私の隣に……」

「ええ!?!のどちゃん!」

「ゆーきは正面のところに移動して……」

「ちよ!?!それはあんまり」あ?」「ハイ、モウシワケアリマセンデシタ。スグニイドウシマス、サセテイタダキマス」

「気持ち嬉しいけれど、僕は空いてるところ……というか丁度空いているところは僕の定位置だから優希ちゃんは移動しなくて大丈夫だよ」
「はい!先生!」

なにやら一瞬だけ原村が鬼の形相をしていたが、まあ気のせいだろうし放っておくとして……

「」「」「いただきます」「」「」

まずは食事だな。

(さて、食べる前にひとつ……ゆーき?)

(うん?)

(後でオハナシしましょうね?)

(アツハイ)

「ただいまく……。あ〜……。つかれたあ〜……」

「帰ったぞ」

「あ、朝日姉ちゃんと夕羅姉ちゃん、お帰りなさい！」

「食事をはじめてある程度たった頃、朝日先生と夕羅先生が帰ってきて澄が出迎えた。」

「ん？客か？」

「うん、スウとののちゃんとその友達と先輩が来てるんだ。それよりも今からどうするの？先にご飯にする？お風呂にする？」

「わたしは澄夜がいいなあ〜」

「何でそうなるのさ、夕羅姉ちゃん……」

「しよがないじゃん……。疲れたんだから……」

「あたしは食事をとらせてもらおうか。久しぶりに和とも話してみたいしな」

「わかった。久〜」

「はいは〜い。すぐに用意するわ〜」

「話ながら上着や手荷物を預かる澄。………なんというか良くできた嫁みたいだな。」

「朝日さん、夕羅さん、ご無沙汰しております」

「お、おとおおおおっ!?!ほ、ほほ本物のゆゆ夕羅プロ!?!すすすすすすばらすぎないですかっ!?!」

「久しぶりだな、和。して……。弘世は別として他の2人ははじめてだな。あたしは涼月朝日だ、よろしくな」

「コホン。……。そして、雑誌などでご存知かもしれませんが改めまして涼月夕羅です。よろしくお願いしますね」

「片岡優希っていうのじえ！よろしくだじえ！」

「わわわたしは花田煌といいますです!!」

「マイペースな片岡とは対照的にながちがちに緊張しながら自己紹介する花田。」

「それにしてもよくここまで来ることができたな和。恵さんはなにも

「言わなかったのか？」

「はい。先生のところに行くと言ったら快くOKを出してくれました」

「フツ、あいつもなかなか隅におけねえじゃねえか」

「あら……姉さんは澄の人気知らないの？今学校では彼の親衛隊が出来るほどらしいわよ」

「親衛隊……？なんだそれは？弘世、なにか知っているか？」

「すいません。私も詳しくは……」

「ああ、それなら私の管理下に置いたから安心して頂戴。はいご飯」

「親衛隊とわ……ふむ。私の計画のいしず」「うん。ののちゃんはこちらよと静かにね？」「はい！先生!!」

「というか親衛隊ができるって……どんだけ人気なのですか」

「んく……というかみんなスイーツ目当てだと思っただけだね……」

「そうとも限らないでしょう？澄夜は十分に魅力がありますからね」

「こう仕向けた人がなにを……」

「ぷぷつ……。いやあくあのときの澄の顔は傑作だったわく♪」

「へえ？どんな顔してたんだ？あたしにも教えてくれよ」

「……いつもすましている澄がか。私も少し気になるな」

「げえ!!」

「はいはい！私も気になるですよ！」

「ええつとねく」「は、話さなくていいよ!!」

そうして、今度は朝日先生と夕羅先生を加えて賑やかに話と食事はどんどん進んでいき……。

私と久が出した料理が瞬く間になくなり後片付けを済ませると既に中学生組を泊まっているホテルに送るため久と夕羅先生が外に出ていったところだった。そして……

「澄夜！すまないが缶ビールをひとつ頼んでいいか？」

「ええ？昨日の今日で大丈夫??」

「ああ。明日から忙しくなるからなその前の一杯だ」

「わかったけど……ほどほどにね？あ、スウもなにか飲む

〜?」

「なら、緑茶か麦茶を頼む」

「了解」

現在、涼月家のリビングに残っているのは私と澄と朝日先生だけとなっていた。

「ほい朝日姉ちゃん、ビール。でこれはスウの麦茶だよ」

「ありがとな。……………つくあくっ！やはり仕事が終わった後はこれに限る!!」

「かといって飲み過ぎちやダメだよ？明日は“入部試験”も控えているんだから」

「……………そうか。もう麻雀部はもう明日やるんだったな」

明日から始まるのは本来部活説明会なのだが、一部の部活……………麻雀部のような全国制覇を目指すような部活動は部活説明会の期間中は新入生の“入部試験”を行う……………と言うものだ。こるは麻雀部のような……………ここ近年は全国進出を逃してはいるもの……………絶大な人気を誇っているが故に新入生達もこぞって入部しようとするだろう……………と言うわけでそのような部活に対して真に部活に貢献するような人材を見つけるべく導入されたんだ。

ただ……………決してこの“入部試験”に合格したとて油断はできない。この次には“仮入部期間”と言うのが設けられているのだが……………。今はその話では無いな。

「そうだ、お前らも出るのならば相応の覚悟を持っていけ。……………と言いたいところだが、澄と久についてはもう合格したも同然だがな」

「え？」

「ちよちよちよ!?朝日姉ちゃん!?それ言っているの!?!」

「ああ。昨日も話して思ったのだが、弘世は中々に信頼の置ける奴と言うのがわかるからな。話しても大丈夫だ……………まあ、誤解のないように言っておくと、何も弟と義妹を依怙贖しようとしているんじゃないよ。この2人の実力ならばあらかたの新入生なら相手にもならないからな」

「……………そうなのか？」

「ええと……………の、ノーコメントで……………」

「だが……………こいつらと張り合えるやつはこの学校にもいる」
「……………というと?」

酒が入っているとはいえ凜とした雰囲気を出し始める朝日先生。入学前に少し聞いたのだが……………朝日先生は白糸台教師陣の中でもダントツの人気を誇るそう。ただまあ今年は夕羅先生もいらっしやるのでそこはどうかかわからないが。

……………じゃなくて。

朝日先生が人気な理由はもちろん容姿や態度もそうだが的確に人の良し悪しを見抜く洞察力を持っているということもあるらしい。そんなこの人が……………まあ家族は別として……………実力を認めるってことはそれだけ凄い人なのだろう。

「聞きたいか?」

「麻雀を嗜む者としては……………」

「だが……………秘密だ。まだお前には話さない」

「……………なるほど。澄の言葉は朝日先生譲りなんですね」

「いや……………これ」「違うよスウ。僕が言っている言葉は朝日姉ちゃんから譲り受けたものじゃない」

「そうなのか?」

「うん」

朝日先生に答えをはぐらかされると前に澄が言っていた言葉のニュアンスを含んだことを言われたから、朝日先生からの受け売りかと思っただが……………どうにも違うようだ。

ただ……………ひとつ気になったのは……………澄が朝日先生がしゃべっているのを遮ってまで否定してきたとき……………

……………なぜだか、昨日の私以上に悲痛な影を潜ませた表情をしていたことだった……………

side 怜

「なあなあなあ怜〜」

「っーん」

「あう……」

学校からの帰り道、何時ものように声をかけてきた親友に対してうちはつつけんどんに扱う。

ふん！昨日せっかく澄とお話ししようとしてたのを邪魔した罰や。

「まあ……そりや久しぶりに幼馴染みと話せるっちゆうところに横槍入れてもうたからな……。ある意味、自業自得やで？」

「そ、それでもセーラとうちとじゃ扱いちやうやんか!!」

「そりや澄のカッコいいところに惚れ込んでデレデレしていたどつかの誰かさんとちごうてセーラはすぐに謝ってきてくれたんや。扱いに差あでるんは当たり前やろ？」

「ええ〜!?そ、そんな〜……堪忍してやあ〜……」

「っーん」

「うう〜……」

「はは……ドンマイやな」

うちのけんもほろろな態度にがつくりと肩を落とすりゅーか。

昨日の電話の後、それはもう四六時中口を開けば「涼月くん」「涼月くん」としつこく色々聞いてきて……そんなんされたら流石に寛大なうちでも堪忍袋の尾が切れるっちゆうもんや。でもまさかりゅーかが異性に惚れ込むとここまでぞっこんになるとはなあ……せつかの膝枕タイムにも澄の事ばっか聞いてきおったし。……

まあ、例えりゅーかでも澄の彼女の座は譲るわけにはいかんけどな。

「いたいた……怜!」

「はい……?あっ!」

セーラ、りゅーかと駄弁りながら歩いたとき、声をかけられて振り向くとそこには……

「久しぶりね。隣の2人は怜のお友達？」

「なんやなんや?怜、知り合いなんか?」

「知り合いも何も……その人……」

「……………澄のお姉さんやで??」

「……………はい?」

何故か澄のお姉さんの1人、涼月星魅さんの姿があった。

2 | ② E N D